

一般国道 140 号（寄居町・花園村工区）

埋蔵文化財発掘調査報告

—III—

つか や きた つか や
塚 屋・北 塚 屋

本文 編

1 9 8 3

序

埼玉県における道路網の整備は、関越自動車道などの幹線道路及び地域開発、環境整備にともなう国道の改良が計画され、着々と建設されています。

一般国道140号線は、国道17号の熊谷から分岐して秩父に至る埼玉県北西部の主要道路であります。関越自動車道花園インターチェンジの建設や国道254号の改良にともない、花園村黒田から寄居町桜沢までバイパス道路の建設が計画されました。埼玉県文化財保護課では、事前に路線内の分布調査を実施し、古墳群を含む4ヶ所の遺跡が確認され、埼玉県土木部道路建設課と慎重に協議を重ねた結果、発掘調査を実施し、記録保存の措置を講ずることになりました。

発掘調査は、昭和53年度に埼玉県の委託を受けて、埼玉県教育委員会が実施し、整理作業は、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が県の委託を受けて昭和57年度に実施したものです。

本書は、一般国道140号バイパス建設に伴う、塚屋・北塚屋遺跡に関する報告書でありますが、多くの新しい事実が発見され記録保存の成果はもとより、これらの資料の数々は、学術研究及び学校教育に資するところが大きいと思われます。

この記録が完成するまでに、種々御協力をいただいた花園村教育委員会、寄居町教育委員会、地元関係各位、埼玉県土木部道路建設課、熊谷土木事務所の方々に深く感謝いたします。

昭和58年3月

財団法人
埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理事長 長井五郎

例　　言

1. 本書は埼玉県大里郡寄居町大字中小前田、花園村大字小前田に所在する塚屋遺跡、北塚屋遺跡C区の発掘調査報告書である。
2. 調査は一般国道140号線バイパス建設に先がた事前調査であり、埼玉県教育委員会が調整し、埼玉県教育委員会が主体となり昭和53年9月1日から昭和54年9月11日にかけて実施し、報告書の作成作業は財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が昭和57年度に受託し、実施した。なお、調査、整理の組織は2ページに示した。
3. 本書は本文、図版編からなっている。
4. 本文、図版編の挿図、図版類の縮尺は次のとおりである。
　　遺構 (1/40、1/60)、土器実測図 (1/5)、土器拓影図 (1/3)、土製品 (1/2)、石器実測図 (1/1、1/3、1/5)、写真図版 (1/3、1/4、1/5)
5. 挿図図版の作成は次の者が行なった。
　　遺構図 (市川修)、土器実測 (市川、島村英之)、石器実測 (曾根原裕明、石塚和則、町田勝則、金子直行、細田勝)、トレース (市川、島村、町田、近江かおる、吉沢みゆき、依田千春、篠原和子、岡本ゆかり)、写真図版 (市川、坂野和信)、土器展開写真 (小川忠博)
6. 本文編の執筆は市川、曾根原、石塚、細田、島村が分担して行ない、文末に氏名を記す。
7. 本書の編集は市川が行ない、横川好富、小川良祐が監修した。
8. 整理参加者
　　島村英之、町田勝則、吉沢みゆき、依田千春、篠原和子、岡本ゆかり (日本大学)、近江かおる (明治大学)
9. 本書を作成するにあたり下記の方々から御教示を受けた。
　　青木秀雄、新井和之、石井寛、岩橋陽一、江里口省二、大塚達朗、金箱文夫、小林達雄、笠森健一、下村克彦、白石浩之、高木義和、中島宏、羽生淳子、深田芳行、土肥孝

目 次

序

例 言

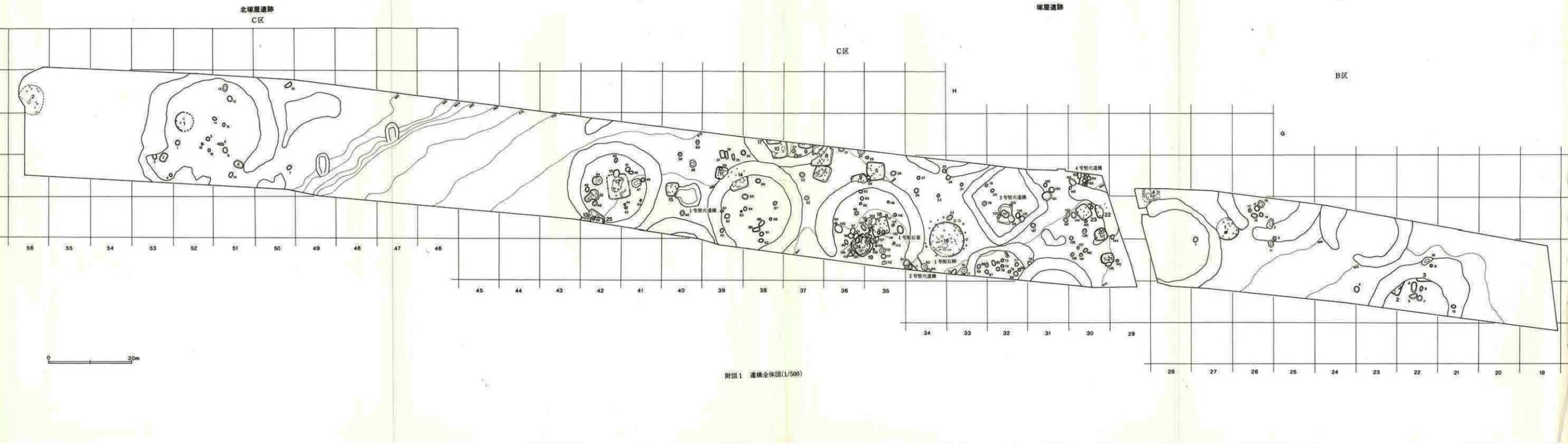
I	発掘調査に至る経過	1
II	立地と周辺の遺跡	3
III	調査の概要	5
1.	遺跡の概要	5
2.	調査の経過	10
IV	塚屋遺跡の調査	13
1.	遺構	13
(1)	住居跡	13
(2)	竪穴遺構	52
(3)	土壙	55
(4)	配石墓	101
(5)	配石跡	102
V	塚屋遺跡(C区)の調査	104
1.	遺構	104
(1)	住居跡	104
(2)	土壙	106

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図(1/25,000).....	4	第29図 20号住居跡(1/60).....	45
第2図 調査全域図(1/10,000).....	5	第30図 21号住居跡(1/60).....	47
第3図 標準土層図(1/40).....	6	第31図 22号住居跡(1/60).....	49
第4図 調査区設定図(1/3,000).....	7・8	第32図 23号住居跡(1/60).....	50
第5図 標準土層図(1/40).....	9	第33図 1号竪穴遺構(1/60).....	53
第6図 1号住居跡炉(1/40).....	13	第34図 1～13号土壤(1/60).....	57
第7図 1号住居跡(1/60).....	14	第35図 14～28号土壤(1/60).....	61
第8図 2号住居跡(1/60).....	15	第36図 29～42号土壤(1/60).....	65
第9図 3号住居跡(1/60).....	17	第37図 43～55号土壤(1/60).....	69
第10図 4号住居跡(1/60).....	18	第38図 2号竪穴遺構(1/60).....	73
第11図 5号住居跡(1/60).....	20		56～57号土壤
第12図 6号住居跡(1/60).....	21	第39図 68～84号土壤(1/60).....	79
第13図 7・8号住居跡(1/60)	23・24	第40図 85～100号土壤(1/60)	83
第14図 9号住居跡(1/60).....	26	第41図 101～118号土壤(1/60).....	88
第15図 10・17号住居跡(1/60).....	28	第42図 3号竪穴遺構(1/60).....	89
第16図 11号住居跡埋甕(1/40).....	29		119～127号土壤(1/60)
第17図 11号住居跡(1/60).....	30	第43図 128～144号土壤(1/60).....	95
第18図 12号住居跡埋甕(1/40).....	30	第44図 4号竪穴遺構(1/60).....	99
第19図 12号住居跡(1/60).....	31		145～157号土壤
第20図 13・25号住居跡(1/60).....	32	第45図 1号配石墓(1/40)	102
第21図 13号住居跡埋甕(1/40).....	33	第46図 1号配石跡(1/40)	102
第22図 14号住居跡(1/60).....	34	第47図 1号住居跡(1/40)	104
第23図 15号住居跡(1/60).....	36	第48図 1号住居跡炉(1/40)	105
第24図 15号住居跡埋甕(1/40).....	36	第49図 2号住居跡炉(1/40)	105
第25図 16号住居跡(1/60)	39・40	第50図 2号住居跡(1/60)	106
第26図 18号住居跡(1/60).....	42	第51図 1～13号土壤(1/60)	109
第27図 18号住居跡埋甕(40/1).....	43	第52図 14～17号土壤(1/60)	110
第28図 19・24号住居跡(1/60).....	44		

附 図

附図 1 遺構全体図(1/500)



I. 発掘調査に至る経過

埼玉県では、増大する交通量に対処するため各種の道路建設工事を進めているが、一般国道140号線でも関越自動車道の建設等に伴い、寄居町、花園村地内でバイパスの建設が計画された。

県教育局文化財保護課では、開発関係部局と各種の協議を図っている。今回の事業の担当課である県土木部道路建設課とも同様の調整は進めていた。

道路建設課から路線内の文化財の所在について文化財保護室（当時）あて照会があったのは、昭和48年12月17日付け道建第1103号をもってであった。これに基づいて文化財保護室では分布調査を実施した結果、繩文時代の集落跡及び古墳群が所在することが確認された。この結果を検討して、昭和49年5月28日付け教文第905号をもって、1.文化財は現状保存することが望ましい。2.やむを得ずかかる区域については発掘調査を実施されたい。という主旨で道路建設課あて回答した。

その後、文化財保護課と道路建設課では保存策について種々の調整がなされたが、路線変更は不可能となつたため、やむを得ず記録保存のための発掘調査を実施することになった。路線内には小前田古墳群をはじめ4ヶ所の遺跡が確認されているが、これらの遺跡について改めて発掘調査のための協議を開始した。

昭和52年2月22日付け道建第741号をもって道路建設課から文化財保護課へ「一般国道140号寄居町、花園村地内の道路改良事業区域内における埋蔵文化財調査について」という協議書が提出された。その内容は次のとおりである。

1. 調査時期および範囲

2. 調査費用（概算）

3. 調査機関

また、調査は昭和52年度・53年度に実施してほしい旨の連絡もあった。

文化財保護課ではこれらに基づいて道路建設課と協議を進め、昭和52年度に花園村黒田地区所在の上南原遺跡の調査、昭和53年度に花園村小前田地区の塚屋遺跡と寄居町桜沢地区の北塚屋遺跡の調査を実施することとなった。発掘調査は文化財保護課が執行委任を受けて行なわれた。

埼玉県知事からは文化財保護法第57条の3に基づく埋蔵文化財発掘通知が、県教育長からは同法第98条の2に基づく埋蔵文化財発掘調査通知が文化庁長官へ提出され、塚屋遺跡・北塚屋遺跡は昭和53年9月1日から調査が開始された。

文化庁からは委保記第17-2535号をもって調査通知を受理した旨の通知があった。

（文化財保護課）

発掘調査の組織

1. 発掘

主 体 者	埼玉県教育委員会	教 育 長	石 田 正 利
事 務 局	埼玉県教育局文化財保護課	課 長	杉 山 泰 之
		課 長 補 佐 (兼 庶 務 係 長)	奥 泉 信
企画調整	埼玉県教育局文化財保護課	文化財第二係長	早 川 智 明 (昭和53年度)
			栗 原 文 藏
			柿 沼 幹 夫
			駒 宮 史 郎
			本 間 岳 史
			井 上 尚 明
庶務経理	埼玉県教育局文化財保護課	太 田 和 夫	
		畔 上 敦 志	
		千 村 幸 平	
発 掘	埼玉県教育局文化財保護課	横 川 好 富	
		鈴 木 敏 昭	
		市 川 修	
		(非常勤職員)	山 形 洋 一
		(非常勤職員)	曾根原裕明
		(非常勤職員)	宮 昌 之

2. 整 理

主 体 者	埼玉県埋蔵文化財調査事業団	理 事 長	長 井 五 郎
		副 理 事 長	岩 上 進
庶務経理	埼玉県埋蔵文化財調査事業団	常 務 理 事	渡 辺 澄 夫
		管 理 部 長	佐 野 長 二
			関 野 栄 一
整 理	埼玉県埋蔵文化財調査事業団		江 田 和 美
			福 田 啓 子
			本 庄 朗 人
			福 田 浩
		調 査 研 究 部 長	横 川 好 富
		調 査 研 究 副 部 長	小 川 良 祐
		(兼調査研究第五課長)	
			市 川 修
			曾根原裕明

3. 協 力 者

大里郡花園村教育委員会、寄居町教育委員会、地元区長及び地元住民

II. 立地と周辺の遺跡

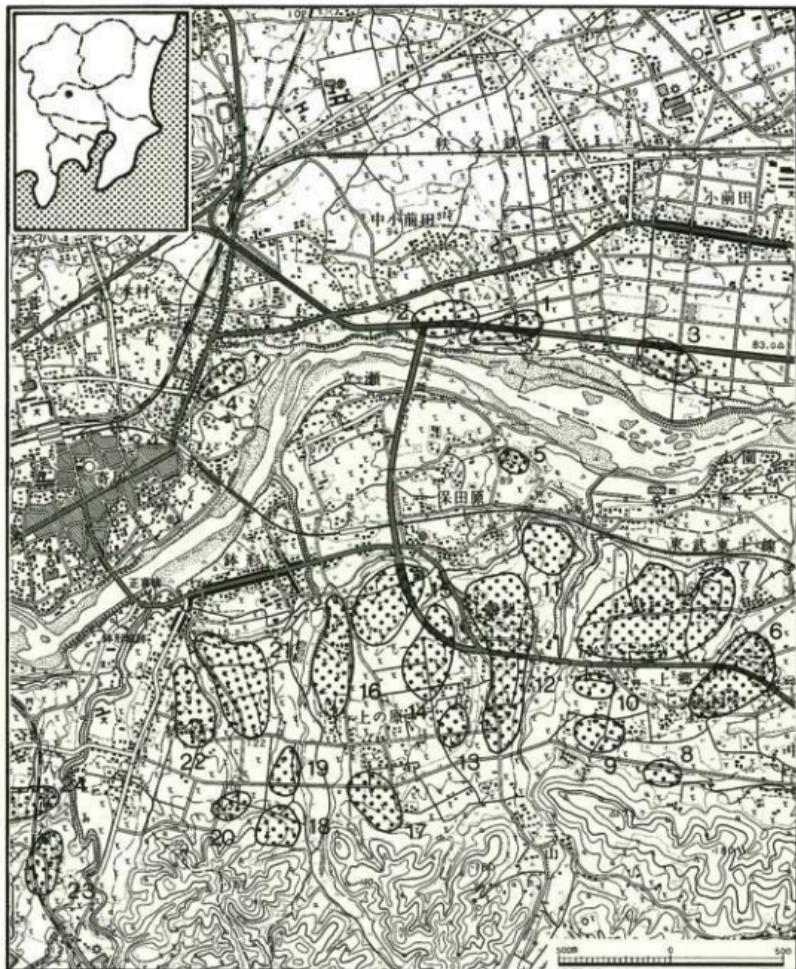
塙屋・北塙屋遺跡は大里郡寄居町大字中小前田から花園村大字小前田にかけて所在する。秩父鉄道の小前田駅より南西に1.0kmの位置にあたり、荒川右岸の河岸段丘上に立地している。

荒川は奥秩父の甲武信岳の麓に源を発して、急流となり秩父山地を刻んで両岸には狭谷地形を形成し流域には河岸段丘が発達している。遺跡の位置する寄居町は荒川の流れが山地部を抜けて広大な荒川扇状地の扇頂部にあたり、流速は一気に緩まり川幅を広げて両岸には河原が発達している。左岸は櫛引台地に連なり、右岸は江南台地へと結ばれている。この附近は両岸に河岸段丘が形成され荒川段丘と呼称されて数段の段丘面を残している。遺跡を乗せる段丘は下位段丘に相当して現河床との比高差は15mを測る。下位段丘には2~5m程の崖線を備える低位段丘が数段にわたり見られ下流に向って扇状に展開している。

遺跡が乗る段丘は2m程の崖線により画されて高位面には北塙屋遺跡が拡がり、平坦部には中期集落址が環状に検出され、崖線に寄った位置には前期土壙群が展開している。塙屋遺跡は低位面に拡がり前期集落址と中、後期の遺構が崖線に沿って帶状に遺構が検出された。

荒川左岸における遺跡の分布は殆んどが塙屋・北塙屋遺跡同様に下位段丘上に立地して、櫛引面では不明瞭な部々が多く流域に沿って見い出せる。上流800mには諸磯a、b式、勝坂、加曾利E式の土器が散布する岩崎遺跡が位置する。下流1kmでは諸磯b式、勝坂~安行3b式の土器と石器が多量に収集されている橋屋遺跡が位置する。さらに下流1kmでは前期諸磯b期の住居跡が11軒と多数の土壙を報告した上南原遺跡(市川1982)が、隣接して勝坂、加曾利E期の住居跡、土壙が多数調査された台耕地遺跡(中島1980)がある。台耕地遺跡の高位段丘には中期集落址である下南原遺跡(鈴木1982)が展開する。荒川左岸では遺跡の分布は少ないが集落の規模は共に大きく前期諸磯a、b期と中期勝坂~加曾利E期の遺跡が接近して営なまれている。

一方、荒川右岸の下位段丘面では遺跡の分布は薄く、この附近では後、晩期の遺物が散布する羽毛遺跡が知られる程度であり20m程の崖線をもつ江南台地上とは遺跡の占地で大きく相違している。この台地は小河川の開析作用による小支谷が走り、台地は分断され平坦で細長い小支谷が拡がっている。小台地には遺跡が殆ど存在して密集する。遺跡は台地縁辺から中央部に至る広範囲に遺物が分布して、早期から後期にかけての土器が採集され、中でも諸磯a、b、勝坂、加曾利E式の土器が濃厚に分布している。これらの遺跡群の内で調査、報告された遺跡としては、諸磯b、称名寺期の住居跡が検出された上郷西遺跡、黒浜、諸磯b、勝坂、加曾利E期が住居跡が調査された甘粕原遺跡、加曾利E期後半の住居跡が検出された露梨子遺跡、諸磯b、加曾利E期の集落であるゴシン遺跡(並木1978)、称名寺期の配石跡が報告された東遺跡(梅沢1972)等がある。この地域は縄文時代を通じて良好な居住地とされたことが判り、さらに両岸にわたって形成された諸磯a、b、勝坂、加曾利E、称名寺期の集落がこのように至近距離に営まれた実態を知るとき、多様な考古学領域の諸問題を想起せざるにはおかない。



第1図 遺跡位置図(1/25,000)

1. 塚原遺跡(前・中・後期)
2. 北塚原遺跡(前・中期)
3. 橋屋遺跡(前・中・後・晚期)
4. 岩崎遺跡(前・中期)
5. 羽毛田遺跡(後期)
6. 東原遺跡(中・後期)
7. むじな塚遺跡(中期)
8. 上郷遺跡(中期)
9. 上郷A遺跡(前期)
10. 上郷西遺跡(前期)
11. 日向上遺跡(前・中期)
12. 露梨子遺跡(前・中・後期)
13. 大塚遺跡(早・後期)
14. ゴシン遺跡(前・中期)
15. 甘柏原遺跡(旱早・前・中期)
16. 東遺跡(中・後期)
17. 上の原遺跡(早・中期)
18. 愛后山遺跡(中・後期)
19. 八幡台遺跡(中期)
20. 愛后山北遺跡(早期)
21. 薬師台遺跡(前・中期)
22. 氷川台遺跡(中期)
23. 萩和田遺跡(中期)
24. 前耕地遺跡(前・中期)

VII. 調査の概要

1 遺跡の概要

遺跡は荒川右岸の下位段丘面に立地する。調査対象面積は路線巾25mで全長600mの約22,000m²であった。発掘調査は昭和53年9月1日から昭和54年9月11日までの期間を要して実施された。

この遺跡は当初、北塚屋遺跡として概要を報告したが(市川1980)、調査区の中央部を横切る約2mの比高差をもつ段丘崖により高位、低位面に2分される段丘を含むものであった。この段丘には時期が異なる縄文時代の集落跡が各々検出された。この結果、同一遺跡名は様々な混乱を招く迫れがあり、各々の小字名をとって遺跡を区分することにした。高位面は北塚屋遺跡とした。この遺跡は縄文中期の勝坂～加曾利E式期の集落跡である。低位面は塚屋遺跡と命名し、縄文諸磧a、b式期と後期の集落跡である。

本書は塚屋遺跡、北塚屋遺跡C区で調査、検出された縄文時代の遺構、遺物について報告するものであり、北塚屋遺跡のA、B区で検出された中期集落跡と塚屋遺跡に存在した10数基の古墳(小前田古墳群)については、順次整理、報告を行なうものである。

塚屋遺跡の調査

遺跡は低位段丘面に立地する。この段丘は荒川を主軸にして約45°方向で北東に拡がっている。全長は約450mを測る巾広の段丘面を備えている。この段丘上に集落跡が帶状に形成されている。遺跡の拡がりは、段丘面で縄文土器が広範囲にわたり採集されることから大規模な集落跡が予想される。



第2図 調査全域図(1/10,000)

調査区となる路線は、段丘を直交するように縦断して全長は500m、巾25mの12,500m²を対象として、東端は下位段丘に統く段丘崖までとした。この長い調査区は東に向って緩かな傾斜を備えている。調査区の設定は、調査区を横切る2本の生活道路の存在により3区に分断されるため、東よりA、B、C区として分割して進めた。グリッドの設定は、調査区を包み込むようにX、Y軸を設けて10m方眼で区画した。グリッドは塚屋遺跡の南東端を基準として、北に向ってA～1列、西に向って1～57列の順に番号を附して、塚屋遺跡は47列前後が境いとなっている。

遺跡の層序は、調査区の長さに比例して多くの変化を示していたが、縄文時代の遺構を検出したB、C区における土層状態を基本として簡単に説明する。

第1層 耕作土である、20cm前後の厚土で遺跡を覆う。色調は淡い茶褐色を呈し、粒子の粗いボロボロした繊りのない土である。

第2層 茶褐色土である。15～20cm前後の厚みをもち、粒子は粗いが全体に締った土であった。

第3層 色調は明るい暗褐色である。赤色のスコリア粒を含み、粘性に富んだ土である。5～15

cm前後の厚さで括がっている。縄文式土器の包含層であり、古墳周溝はこの上面で確認された。

第4層 明るい黄褐色を呈し、粒子の細かい砂質土であるが、粘性を少し備えている。縄文時代の遺構の確認面となった土層である。厚さは15～30cmで一定していない。

第5層 色調は4層より明るい、黄褐色であり、性質も近似している。小礫を少量含んでいる。

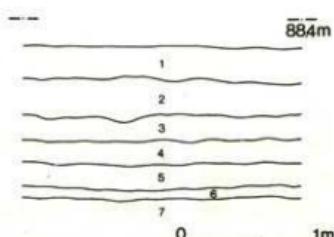
第6層 小礫で一層を形成する。5層の明黄褐色土のブロックを含む。厚さは10cm前後であった。

第7層 6層中に拳大の礫を多く含んだ層である。

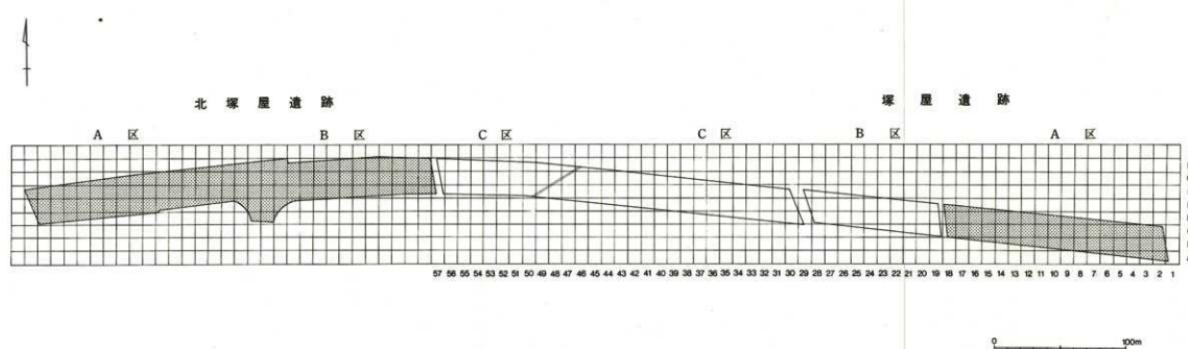
以上の基本土層は、C区とB区の22例までの状態であり、1～22例では、3層に対応する面で7層に近似した礫層が表して括がっていた。この区域では縄文土器は1片も検出されていない。

調査の結果、塚屋遺跡からは、10数基の古墳周溝に切られるものの、縄文時代前期の遺構を中心とした集落跡がB、C区から検出された。遺構としては、住居跡が25軒で諸磯a期9軒、諸磯b期13軒、加曾利E期が1軒と配石を伴なう大型の住居跡である堀ノ内期に属するものが次々と検出された。土壌は、諸磯a、b期に属するものが殆んどで、土壌内から多量の土器が検出され墓壙的な性格を示すものもある。他には、諸磯C期に属するものが2基、称名寺期のものが1基で総数185基を数える。更に壇底に石を敷きつめた称名寺期と思われる配石墓が1基検出された。又、後期に属すと思われる配石跡が1基が検出された。

これら検出された各期の住居跡と土壌は、調査範囲が段丘を縦断する路線内ということで、集落内の線的な把握に留まるが、遺構の分布については、B、C区で観察された砂質黄褐色土の括がりと一致する状況を示すもので、段丘崖に対応して一定の巾を有し統くものと推測される。前期の諸磯a、b式期に属する遺構は、この面に散在して分布するもので、偏在及び集中する傾向は認めら



第3図 標準土層図(1/40)



第4図 調査区設定図(1/3,000)

れない。土器群の検討は細分を可能として、遺構の時間的な位置が明らかとなるが、集落内部の動きも同様な結果がえられる。刻期集落跡の構成は、相当広範囲にわたって遺構が分布する状況を示して、諸磯 a、b 式期を貫く変遷が潜んだ遺跡と思われる。中期の住居跡は単独で存在したが、調査区からの刻期出土は皆無に等しく、遺構の存在は少ないとと思われ、北塚屋遺跡との関連を重視したい。後期の遺構は集中して認められた。後期の各遺構における状況は特殊な在り方を示すもので、生活空間は段丘上の別地点に拡がるものと思われる。

出土遺物は、各遺構に伴なうものを含めて、前期黒浜式、諸磯 a、b、c 式、浮島式土器を中心とし、加曾利 E 式、称名寺式、堀ノ内式、加曾利 B 式土器等が出土している。石器は、前期の諸磯 a、b 式に伴なうものが殆んどで、出土量も多く内容も豊富であった。

北塚屋遺跡（C 区）の調査

遺跡は高位段丘面に立地して標高は 90.2m 前後である。C 区は、中期の遺構が密集して検出された A、B 区とは、生活道路を挟んで東端の段丘崖に至る約 3,000m² の調査区である。グリッドの設定は塚屋遺跡の延長で 10m 方眼で分割し、57 列の E ~ H に相当する。段丘はほぼ平坦面であった。

C 区の基本土層は、以下に説明するが、家屋の存在により、確認面に達する擾乱を受けたところが広く認られた。

第 1 層 耕作土である。厚さは 20m 前後であった。

色調は淡い黒色でボロボロした土であった。

第 2 層 色調は暗茶褐色であり、粘性を少し帯びる。

厚さは 10cm 前後である。

第 3 层 色調は暗褐色である。粘性は強く、全体に

締った土である。赤色スコリア粒を含んで

いる。厚さは 10cm 前後で薄いところは 5 cm

程のところも見られた。

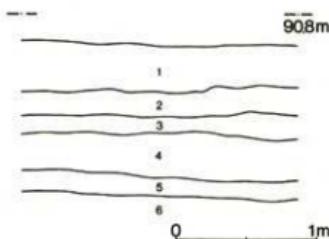
第 4 層 遺構確認面となった層である。色調は暗い黄褐色で、小礫を少量含んでいる。粘性が強く固い土である。

第 5 層 色調は 4 層より黒味を増す黄褐色で、粘性も強い。小礫を多量に含んでいる。

第 6 層 5 層に近似して、拳大の礫を含む土である。

調査の結果、北塚屋遺跡 C 区からは擾乱を受けた 2 軒の加曾利 E 式期の住居跡と、時期不詳を含んだ 18 基の土壙が検出された。住居跡の中央部には炉体土器が見られ、加曾利 E II 式であった。土壙は、諸磯 a 式期に属するものが 5 基、加曾利 E 式期のものが 4 基であった。これらの遺構の分布は、前期の土壙で段丘崖の縁辺部に集中して見られ、中期のものは段丘の平坦面に見受けられた。

出土遺物は、遺構からの伴出は少なく、炉体土器及び、5 号土壙で検出された諸磯 a 式の深鉢土器の他は細片が出土地に留まっていた。石器についても破損品が数点であった。



第 5 図 標準土層図(1/40)

2. 調査の経過

塚屋遺跡、北塚屋遺跡C区の調査経過を、検出された縄文時代の遺構を中心に1ヶ月各に追う。

9月

最終的な打合せを熊谷土木事務所と現地で行なう。引続いて塚屋遺跡C区に現存した2基の古墳について墳丘測量を実施する。墳丘部にはトレーナーを設定して主体部と周溝の確認を行い、併行してテストピットを認意に設定して遺跡の拡がりと遺構確認面の把握を行い、重機による表土の排土作業に備える。テストピットの結果、塚屋遺跡B、C区において縄文時代前期の土器が多く出土して集落跡の存在が明確となった。重機は、まず塚屋遺跡A区で作業を始め、西側より作業員による遺構確認を開始する。A区の土層は、表土下で小礫を含む暗褐色土で、その下では礫層が拡がって遺構の存在は否定的であったが、調査区東端の段丘縁辺において古墳石室が単独で確認された。縄文時代の遺構、遺物は全く検出されなかった。下旬には石室の実測を残してA区の作業は、一応終了となった。統いて塚屋遺跡B区で重機が作業を始め、同時に遺構確認の作業を開始する。

10月

塚屋遺跡B区における遺構確認の結果、古墳の周溝が4基と周溝に切られる住居跡が4軒、土壙が多数確認された。これらは調査区の西半分に片寄って存在していた。調査は、古墳周溝に重点を置いて始める。縄文時代の遺構については、周溝の検出の進行状態により開始する。出土する縄文土器は前期諸磧a、b式と若干量の諸磧c式で占められている。統いて調査する塚屋遺跡C区への遺構の拡がりが予想される。周溝の調査が進む。埴輪の出土が少ない。

11月

古墳周溝の調査を継続する。1号住居跡を掘り始める。周溝に挟まれるため覆土が荒れてプランは不明瞭であった。掘り込みは浅く南側で一部えられた。覆土及び周辺からは前期の土器の出土が多いが、中央部に石圓埋甕炉が見られ、中期加曾利E式期の住居跡と判明した。炉体土器は加曾利E II式の連弧文土器であった。統いて2、3号住居跡を殆める。共に周溝に切られて全体の1/5程度のプランを残していた。遺物の出土は少なく、2号住居跡は諸磧b式、3号住居跡は諸磧a式期のものである。1~3号住居跡の写真撮影、実測を行い下旬に終了する。土壙の調査を一部始め、3号土壙では埋設土器が伴う。北塚屋遺跡C区で重機が作業を始め、一部遺構確認を行う。

12月

古墳周溝の調査が進展する。調査区の北西コーナー一部の落込みを精査し、ピットと壁溝状の施設を検出し、プランは不明瞭であるが4号住居跡と認定し、諸磧b式の土器が主体を占めて出土した。土壙の調査が進み、土器を含むものが多く、1号土壙は諸磧C式期、他の土壙は諸磧a、b式期の時期である。中でも15号土壙からは多量の土器が出土した。下旬には周溝及び縄文時代の遺構を含めて、写真撮影、実測を終了し塚屋遺跡B区の調査を終了する。併行して進めていた北塚屋遺跡C区の表土剥も終わり一部遺構確認を始めて、帆立貝式の前方後円墳を確認する。

1月

北塚屋遺跡C区の調査に移る。C区には家屋が有ったため広範囲にわたり擾乱が激しく見られたが、古墳周溝3基、住居跡が2軒、土壙多数が確認された。周溝と石室の調査と併行して縄文時代の1、2号住居跡を掘り始める。1号住居跡は擾乱のため壁は飛ばされ、炉と柱穴の検出に留まり、2号住居跡は半分が擾乱により不明となっていた。共に炉体土器を備えて中期加曾利E式期の住居跡であった。土壙は17基確認されたが、遺物の出土が少く判然としない部分が多いが、段丘縁辺に位置するものは諸磯a式期のものであった。中でも5号土壙では、深鉢土器が押漬された状態で検出された。塚屋遺跡C区の表土剥を開始する。

2月

北塚屋遺跡の調査が進む。同時に塚屋遺跡C区の遺構確認を行う。古墳周溝と共に縄文時代の遺構が次々と確認される。中旬には北塚屋遺跡C区で確認された縄文時代の遺構については作業が終了する。塚屋遺跡C区に主力を移して、古墳周溝の調査に集中する。埴輪の出土が多い。中旬、周溝の調査に支障のない範囲で縄文時代の遺構に着手する。まず5、6号住居跡を掘り始める。5号住居跡では覆土の上面から遺物の出土が多い、6号住居跡は掘り込みが浅い。5号住は諸磯b式、6号住は諸磯a式土器が出土した。

3月

古墳周溝の調査に作業の重点を置く。6号住居跡の作業終了。16~42号土壙を順次掘り始める。下旬には5号住居跡の写真撮影、実測を行い作業が終了する。土壙については終了後に写真、実測を行う。調査された土壙は、一部不明なものを除いて諸磯a、b式期のもので、20、24、28、29号土壙では図化できる土器が出土し、各土壙でも遺物の含有が多い。周溝の調査が進み埴輪の出土が多量であった。

4月

古墳の調査に作業の重点を置き、確認されている周溝の検出を進める。同時に2基の石室について精査を始める。縄文の調査については、再度調査区の遺構確認を行なった。

5月

古溝周溝の調査を継続する。中旬より住居跡の精査を始め、重複する7、8号と9、11、12号住居跡について作業が進む。7、8号住居跡は掘り込みが深く、床面から浅鉢2個体が出土する。9号住居跡の作業が終了する。11号住居跡では、埋甕が検出される。12号住居跡は擾乱を多く受けたプランが不明瞭であるが、遺物の出土量が多い。各住居跡では焼土の検出ができず、炉の確認ができない。土壙の調査も順次進む。

6月

古墳周溝の調査が殆んど終了する。10、13、14、15号住居跡の調査を始める。10号住居跡では覆土上面から多量の遺物を含んでいる。15号住居跡は掘り込みが浅いが、床面に多くの遺物が広がって、床面には埋甕が3ヶ所設けられる。以然焼土の検出ができない。引続いて1号竪穴遺構に着手、遺物無く、覆土は古墳周溝に近い、性格不明、10号住居跡 遺物出土量多く実測をとりながら作業を進める。7、8、15号住居跡の作業が終了。土壙の作業も進む。遺物の出土例が多い。

7月

墳丘が現存した1、2号墳の石室実測の終了を待って、重機により削平して墳丘下の遺構確認を行い多数の住居及び土壙を確認する。16号住居跡を掘り始める。16号住居跡の覆土には、大型の河原石が全体に浮いて馬蹄状に検出される。遺物は後期の土器が出土。入口部は風倒木の存在によって不明であった。次いで17、18、19号住居跡に着手、19号住居内には1軒住居跡が重複し24号住居跡と命名する。併行して土壙も継続して調査する。107号土壙では大量の土器が出土して、称名寺期であった。又、隣接して1号配石墓の検出、土壙内より遺物が多く出土する。

8月

20、21号住居跡に着手する。20号住居跡は古墳周溝に切られるものの、覆土内には多量の土器が検出される。21号住居跡も同様で遺物の出土多い。共に焼土確認されず。土壙は併行して調査が進み68~121号土壙を終了する。

9月

22、23号住居跡を調査する。併行して122~208号土壙を掘り進む。142号土壙は諸磯C式を出土、147号土壙は、甕棺状の深鉢が埋設されていた。更に153~157号土壙は方形状の落込みを伴なって集中する。土器の出土多い。引続いて、写真撮影、実測を行う。写真、実測図の整理、点検を行い9月11日に全てを終了する。

(市川 修)

V. 塚屋遺跡の調査

1. 遺構

(1) 住居跡

1号住居跡 (第6・7図)

E・D-26・27グリッドに位置する。東、西壁部は古墳周溝にそれぞれ切られている。住居の検出状況は、重複する周溝覆土が拡がり、北西部に認められた風倒木痕により、住居跡覆土の残りと確認面が乱れて、プランの確認が不明瞭であったが、石圓炉の側石が検出されたことにより、精査を行なった結果、南壁部を検出したもので保存状態の悪い住居であった。

プランは東、北、西壁を欠失するが、南壁部がかろうじて検出された、その形状から円形を呈すと思われる。規模は径6m程と推測される。壁高は高いところで8cmを測る。床面は軟弱で明瞭に識別されたものではない。状態は中央部に向かって緩かな傾斜を備えて周辺部より5cm程浅く窪んでいる。柱穴は11本が検出された。配置は壁に寄るものと、中央部に不規則に見られる。深さは南東壁寄りの柱穴が深く36cmを測り、浅いものは14cmであり、30cm前後に深度が集中している。炉は南西部に片寄って位置する。形態は3個の細長い側石を用いた石圓炉で北側の一辺を欠いている。炉内には胴下半を欠く深鉢が正位に埋設されたものであった。炉の規模は長径1mの不整橿円形で、炉床は40cmの深さで鉢状に掘り込まれたものである。

炉の覆土を説明する。黒色土を基本に7層に識別された。覆土内には炭化物、焼土の検出は無い。

第1層 漆黒に近い黒色土である。(小粒の黄褐色土のブロックを含む。粘性に富む。)

第2層 黒色土である。(1層と共通するが、黄褐色土のブロックを含まない。)

第3層 黄褐色土である。(暗い色調の黄褐色土のブロックである。)

第4層 黒色土である。(2層と共通する。)

第5層 黒色土である。(明るい色調づ1、2、4層とは区別される。粘性に富む。)

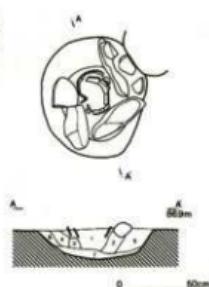
第6層 黒色土である。(5層中に黄褐色土のブロックを含んぜいる。)

第7層 黄褐色土である。(暗く汚れた色調である。粘性に富む。)

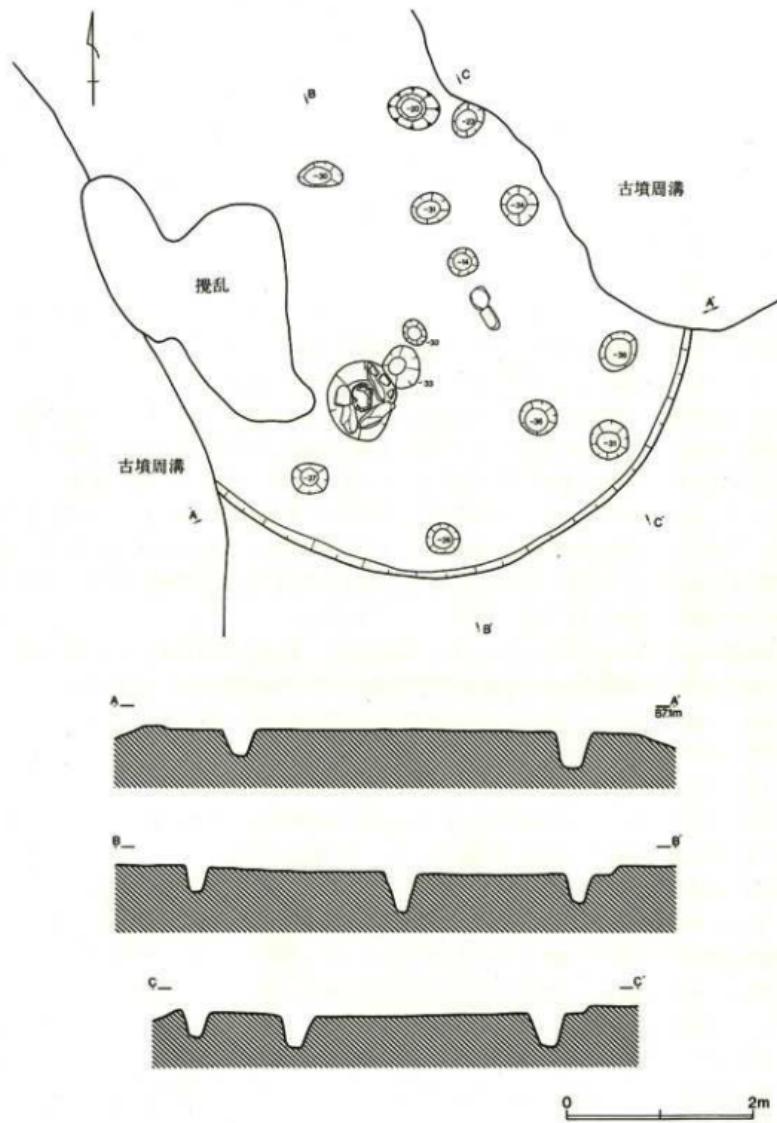
この様に炉内からは焼土の検出が一切されていない。この状態は前期住居跡群でも同様で、位置と存在も不明となっている。遺構の構築面である砂質黄褐色土は熱を受けても赤化しづらい性質を備えるものと思われる。

遺物の出土は、覆土の残りが薄いために少ない。炉の埋設土器は中期加曾利E式であった。破片の殆んどは前期の土器であり、中期の土器片は一片も出土していない。

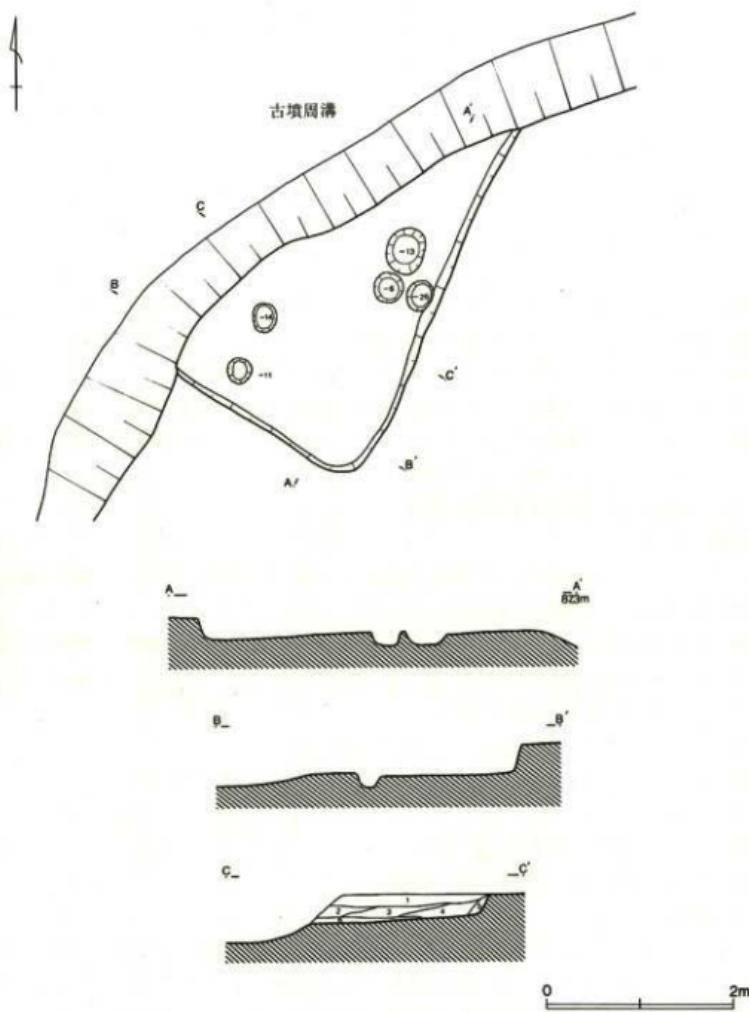
住居の時期は、埋設土器から加曾利E II式期である。



第6図 炉(1/40)



第7図 1号住居跡(1/60)



第8図 2号住居跡(1/60)

2号住居跡（第8図）

C-24・25グリッドに位置する。古墳周溝により、住居の1/5が切られている。検出された部分は東南コーナー部と壁の一部であり、保存状態の悪いものであった。

プランは検出されたコーナー部の形状から方形もしくは長方形を呈すると思われる。壁は各々直線的である。壁高は南東壁が24cm、南西壁では20cmと低くなっている。立ち上がりは鋭い状態である。コーナー部は若干丸味を備える。床面は北側に向って傾斜を備えている。状態は軟弱な面であった。柱穴は6本が検出された。配置は南東壁際の中程に縦って3本と南西壁部に2本である。深さは深いものが26cm、浅いものは6cmであった。周溝は検出されていない。炉は不明である。

覆土は6層に分かれる。暗褐色土と茶褐色土により充填される。粘性に富んだ土層である。

第1層 暗褐色土である。（明るい色調である。粘性に富む。炭化物、赤色スコリア粒を含有。）

第2層 暗褐色土である。（1層に近いが、黄褐色土のブロックを含む。含有物は同一である。）

第3層 茶褐色土である。（2層より色調は明るい。黄褐色土のブロックを多く含む。）

第4層 茶褐色土である。（明るい色調である。黄褐色土のブロックを含む。炭化物を含む。）

第5層 黄褐色土である。（暗い色調であり、ブロック状のもので構成される。）

第6層 茶褐色土である。（明るい色調である。粘性に富んでいる。炭化物の含有が多い。）

遺物の出土は、全体に床面から浮いた状態であった。土器の出土は少数である。石器は数点であった。自然礫の出土が多く、覆土上面で検出された。

住居の時期は出土土器から諸磯b式期である。

3号住居跡（第9図）

D-22グリッドに位置する。2号住居跡とは隣接している。古墳周溝に切られて、住居の南壁の一部の検出に留まり、保存状態が悪いものであった。

検出された南壁と南西コーナー部からプランは方形か長方形と思われる。南壁は直線的である。コーナー部は鋭く曲る。壁高は10cm前後と低い立ち上がりであった。床面は平坦で軟弱な状態である。柱穴、周溝、炉は検出されなかった。

覆土は暗褐色土で2層に分けられる。炭化物の含有が多い。

第1層 暗褐色土である。（色調は黒味が強い。粘性に富んでいる。炭化物の含有が多い。）

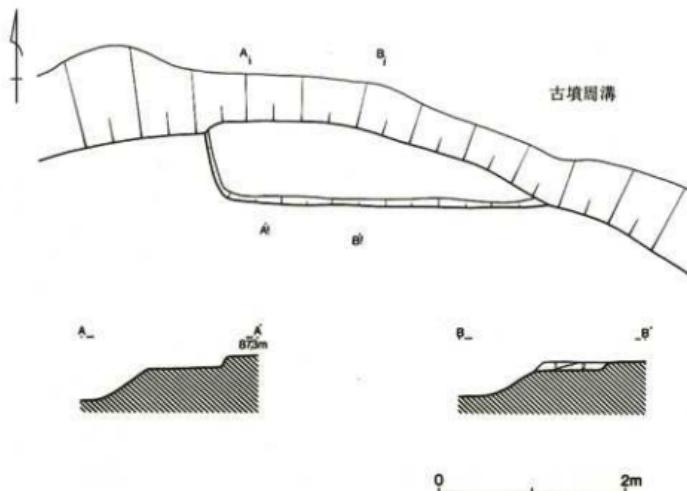
第2層 暗褐色土である。（1層に近似する土で、黄褐色土のブロックを含む。炭化物の含有が多い。）

遺物の出土は若干量で、石器の出土は無い。

住居の時期は出土土器から諸磯a式期である。

4号住居跡（第10図）

C・D-28・29グリッドに位置し、B区の北西隅で検出された。住居の南部分は古墳周溝に切られている。北側は調査区外にはいる。検出された範囲は部分的なものであり、住居と認定するには不明瞭な状態であった。検出状況は遺構の構築面が暗褐色土であり、床面を黄褐色土の上面としていたため、覆土と基本土層である暗褐色土の識別が明確にえられず、黄褐色土の上面まで掘り下げてしまった結果、柱穴、周溝の落ち込みが確認されたことで、土層断面の観察により西壁となる立ち上がりが確認され、住居跡として認定したものである。



第9図 3号住居跡(1/60)

住居の検出範囲と状態からプランは不明瞭であるが、検出された周溝の状態から方形か長方形と思われる。床面は黄褐色土の上面であり、状態は軟弱で周辺部との差違は見い出せない。柱穴は単独で検出されたものと、不整形の落ち込みに伴って検出された。配置は不規則であり集中して見られる。深さは最高で41cm、浅いものは12cmを測る。径は20~40cmを測る。不整形の落ち込みは、覆土が柱穴と共に通して土壤とは区別される。性格は不明であるが、住居に附隨する施設と思われる。南の落ち込みは柱穴を伴い、壁の傾斜は強く、底面は平坦で、深土は36cmを測る。北側のものは、皿状に落ち込んで深さは22cmを測る。周溝は西に位置して部分的である。巾は30cmで巾広く、深さは北で5cmと浅く、南では15cmと深くなっている。炉の確認はできなかった。

土層断面は表土層から観察できた。覆土は基本土層の暗褐色土と近似するが、多量の炭化物を含んでいた。覆土は5層に分かれ。粘性に富んでいる。遺物は4~6層にかけて含まれていた。

第1層 表土（色調は茶褐色である。ボロボロしている。土盛りのため厚くなっている。）

第2層 茶褐色土である。（粒子は荒いが縮っている。）

第3層 暗褐色土である。（色調は明るい。粘性に富む。茶褐色土のブロックを含む。）

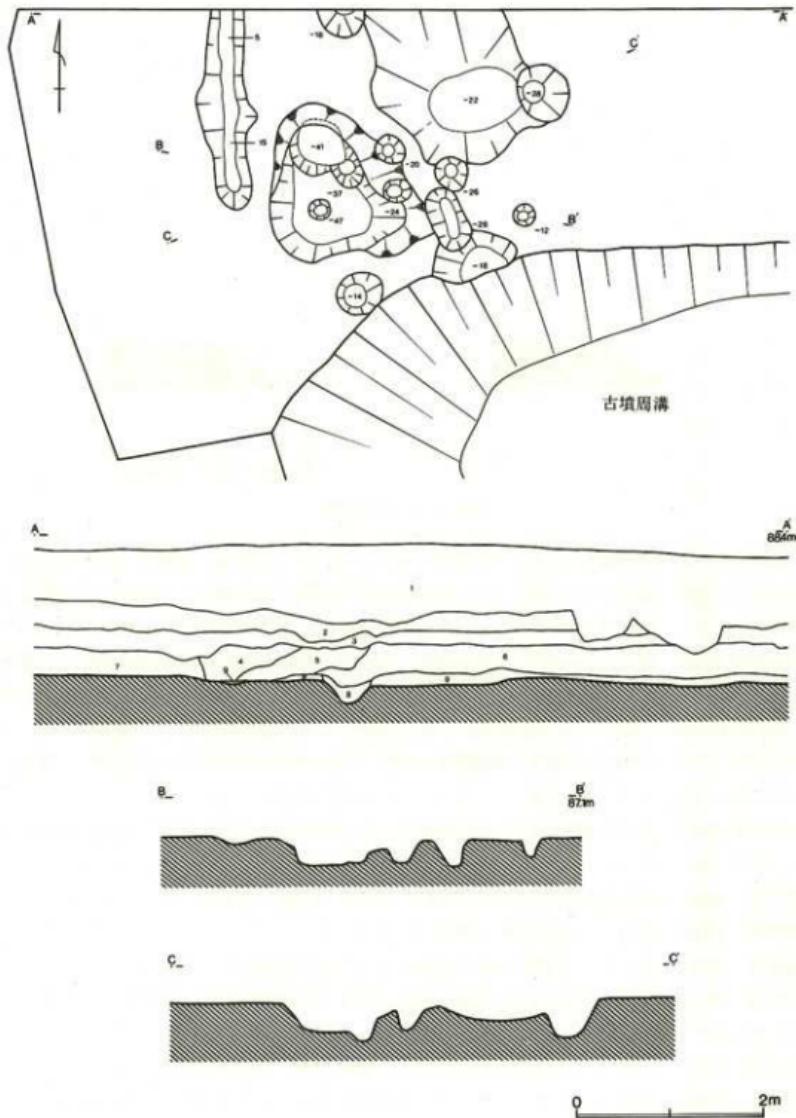
第4層 暗褐色土である。（黒味が強い色調。粘性に富む。炭化物の含有が多い。赤色スコリア粒を含む。黄褐色土の径1cm程のブロックを含む。）

第5層 暗褐色土である。（4層より色調は明るい。粘性が強い。炭化物の含有が多い。）

第6層 暗褐色土である。（5層に近似するが、炭化物の含有が多い。赤色スコリア粒を含む。）

第7層 暗褐色土である。（色調は4層より暗い。粘性に富む。炭化物の含有は目立たない。）

第8層 茶褐色土である。（色調は暗い。炭化物を含んでいる。）



第10図 4号住居跡(1/60)

第9層 茶褐色土である。(8層より若干明るい色調。炭化物の含有が多い。)

遺物の出土は覆土である4、5層と6層の西寄りで多く検出された。土器は小破片が多く接合も少ない。柱穴と落ち込みからの出土は少數であった。石器は少ない。

住居の時期は出土土器から諸磯b式期である。

5号住居跡(第11図)

F-35グリッドに位置する。西側には6号住居跡が隣接する。東西壁のコーナー部は59号土壤に切られる。南壁部では古墳周溝と重複するが住居の保存状態は良好なものであった。

プランは4m×4mで方形を呈する。壁は東壁が若干乱れるが、他の壁は直線的に検出された。各コーナー部の形状は若干丸味を備えている。壁高は25~30cmを測る。立ち上がりは傾斜を備えている。床面は明瞭に検出され、1~2mmの小礫を含んだ黄褐色土面を床としていた。全体に平坦であるが、南壁際では浅く窪んでいる。柱穴は14本が検出された。主柱穴となるものは各コーナー部に寄る4本と思われる。内側には支柱穴となる柱穴が均一に配置されている。西壁際には3本の柱穴が等間隔に列んでいる。主柱穴は東南コーナー部のものを除いて24cm以上の深さを備え、支柱穴も同様な深度を示している。他は4~20cmを測る。柱穴の径は20~25cm程度均一的である。周溝は検出されていない。炉は焼土および掘り方の落ち込みは確認できず不明である。

覆土は15層に分かれるが、基本的には黒褐色土と茶褐色土の2層に分類される。炭化物の含有が多い。

第1層 黒褐色土である。(色調は黒味が強い。粒子が荒くザラつく。炭化物の含有多い。)

第2層 黒褐色土である。(1層より明るい色調。粒子が荒い。赤色スコリア粒、炭化物を含む。)

第3層 黒褐色土である。(1層より黒味が強い。炭化物の含有が多い。)

第4層 茶褐色土である。(暗い色調。炭化物、赤色スコリア粒を含有。粘性に富む。)

第5層 茶褐色土である。(4層より明るい色調。粘性に富む。炭化物、赤色スコリア粒を含有。)

第6層 茶褐色土である。(5層に近似するが、黄褐色土のブロックを含有)

第7層 黑褐色土である。(1層より色調は明るい。含有物は1層と同一。)

第8層 黑褐色土である。(3層より色調は明るい。炭化物は径1cm前後と大きいものを含有。)

第9層 黑褐色土である。(8層より色調が明るい。含有物は同一である。)

第10層 黄褐色土である。(ボロボロした黄褐色土のブロック。含有特は無い。)

第11層 茶褐色土である。(明るい色調。小礫、炭化物を含む。)

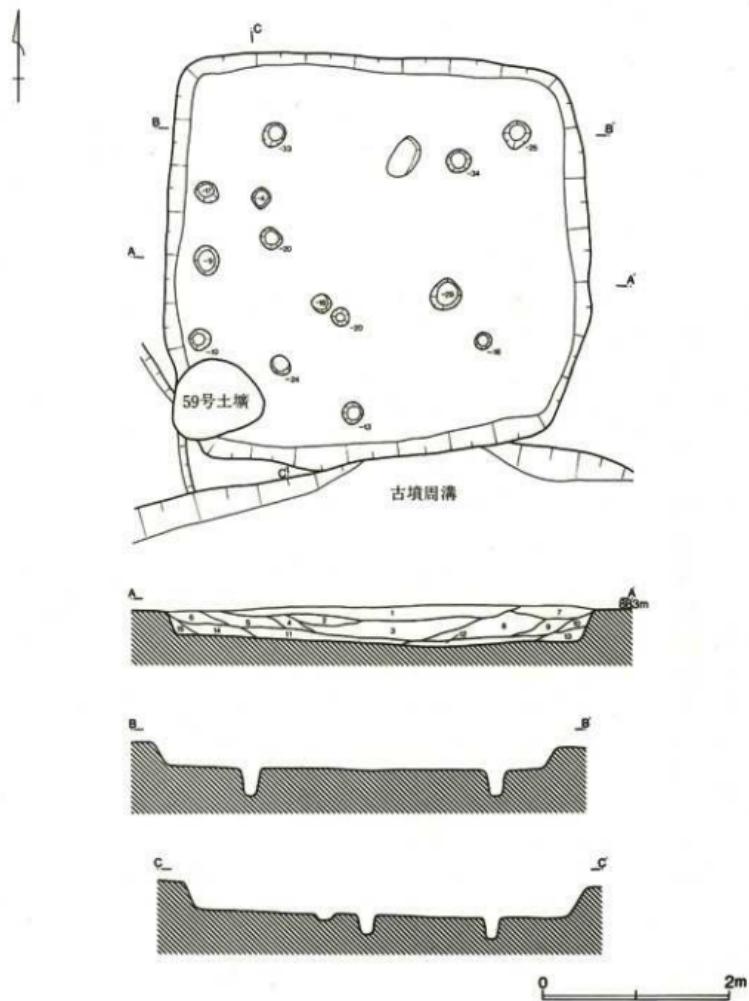
第13層 茶褐色土である。(11層中に黄褐色土のブロックを含む。炭化物の含有が多い。)

第13層 黄褐色土である。(10層より色調は暗い。ブロックで構成。含有物は無い。)

第14層 茶褐色土である。(6層より明るい色調。黄褐色土のブロックを含む。)

第15層 黄褐色土である。(13層と同一層である。)

遺物の出土は1~7層にかけて集中的に検出された。全体に床面より浮いた状態であった。土器および石器の出土量が多い。土器の出土は同一個体が覆土内で広く分布するもので、接合、復原により固定されたもので、纏った状態で検出されていない。石皿等の石器も広く分布して出土した。北壁部に寄った位置の床面には大型の河原石が検出された。使用痕は観察されない。



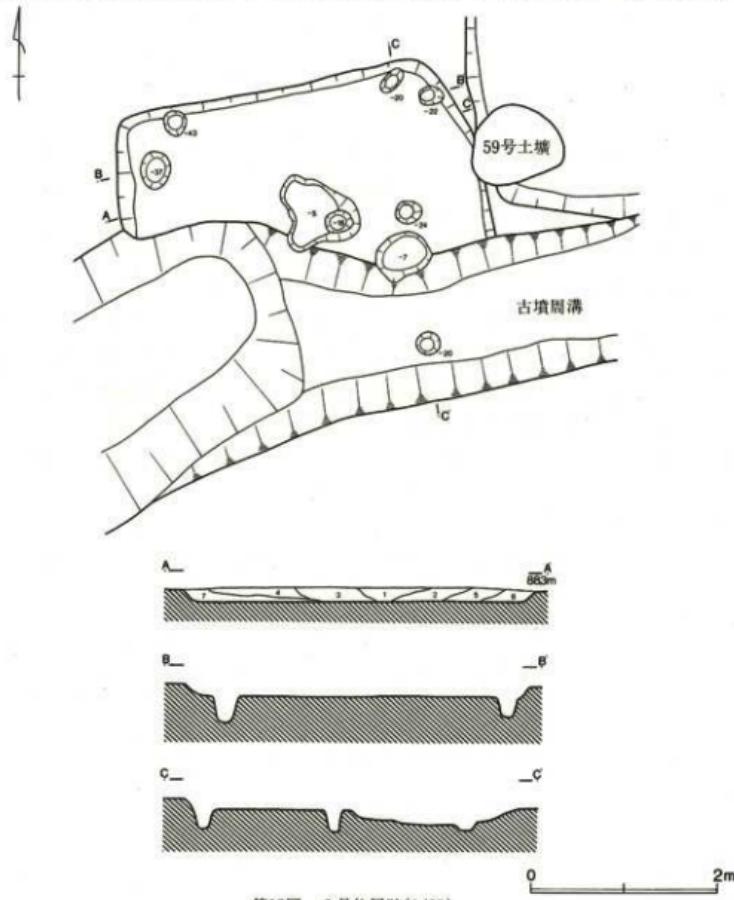
第11図 5号住居跡(1/60)

住居の時期は出土土器から諸磯 b 式期である。

6号住居跡（第12図）

F-35・36グリッドに位置する。5号住居跡と隣接する。西壁の中央部には59号土壙が有り切られている。住居の南半分は古墳周溝に切られ欠失する。住居の掘り込みは浅く保存状態は悪い。

プランは検出された北半分の状況から方形と思われる。北壁は34mを測る。コーナー一部は鋭く曲る。壁の形状は北・西壁部は直線的であるが、東壁は膨みを備えている。壁高は10cmと低く、傾斜の強い立ち上がりである。床は平坦な面で検出された。状態は軟弱であった。柱穴は全部で7本が検出された。コーナー部際には2本組みの柱穴が検出され主柱穴と思われる。中央部より東に寄った位置には2本の柱穴が配置されている。古墳周底にも柱穴が1本検出されている。柱穴の深度は



第12図 6号住居跡(1/60)

全体に深く、北西コーナー部のものは、37、43cmと深くしっかりした状態である。床面の中央部には皿状の落ち込みが2ヶ所で検出された。深さは6、7cmと浅いもので、位置から炉と推測されるが、覆土内からは焼土の確認ができず性格は不明である。周溝は検出されていない。

覆土は7層に分かれる。粘性の強い締った土で、炭化物を含んでいる。

第1層 暗褐色土である。(暗い色調である。粘性に富む。炭化物、赤色スコリア粒を含有。)

第2層 暗褐色土である。(1層より色調は明るい。炭化物の含有が少ない。)

第3層 暗褐色土である。(1層より色調は暗い。炭化物、赤色スコリア粒を若干含む。)

第4層 暗褐色土である。(3層と近似するが、炭化物の含有が無い。)

第5層 茶褐色土である。(2層より色調は明るい。粘性に富む。炭化物の含有少ない。)

第6層 黄褐色土である。(ブロックである、色調は明るい。)

遺物の出土は、覆土の残りが薄く少數であり、石器は検出されていない。

住居の時期は出土土器から諸磯a式期である。

7号住居跡 (第13図)

F-36・37グリッドに位置する。8号住居跡とは北壁部で重複して、北東コーナー部が切られ失する。住居の掘り込みは50cmと深く、保存状態は良好であった。

プランはコーナー部が丸味を備えた隅九方形を呈し、一辺は3.5m前後を測る。壁高は50cm前後を測り、壁は傾斜をもって立ち上がる。床面はほぼ平坦であるが、東壁際では若干高くなっている。状態は軟弱である。柱穴は12本が検出された。各コーナー部際には主柱穴と思われる4本が位置して、東、西壁に寄った位置に各々2本が検出される。中央部の落ち込み内からは4本が見られ、内側の柱穴は不規則な配置であった。深さは全体に浅く9~22cmである。中央部で検出された楕円状の落ち込みは、位置として炉と思われるが、覆土から焼土は検出されていない。深さは6cmと深く皿状に掘り込まれている。周溝は検出されていない。

覆土は24層に分かれる。黒色土が発達して、全体に軟弱な土であり、炭化物の含有が多い。8号住居跡との切り合いは土層断面に明晰に観察できた。

第1層 黒色土である。(色調は明るい。軟質である。炭化物、赤色スコリア粒を含む。)

第2層 暗褐色土である。(色調は暗い。粘性を若干備える。炭化物、赤色スコリア粒、黄褐色土のブロックを含有。)

第3層 茶褐色土である。(暗い色調。粘性に富む。赤色スコリア粒、炭化物を含む。)

第4層 黄褐色土である。(軟質である。暗褐色土のブロックを含む。)

第5層 黒色土である。(色調は1層より明るい。粘性に富む。炭化物、赤色スコリア粒を含有。)

第6層 茶褐色土である。(明るい色調。黄褐色土粒子を含む。粘性に富む。)

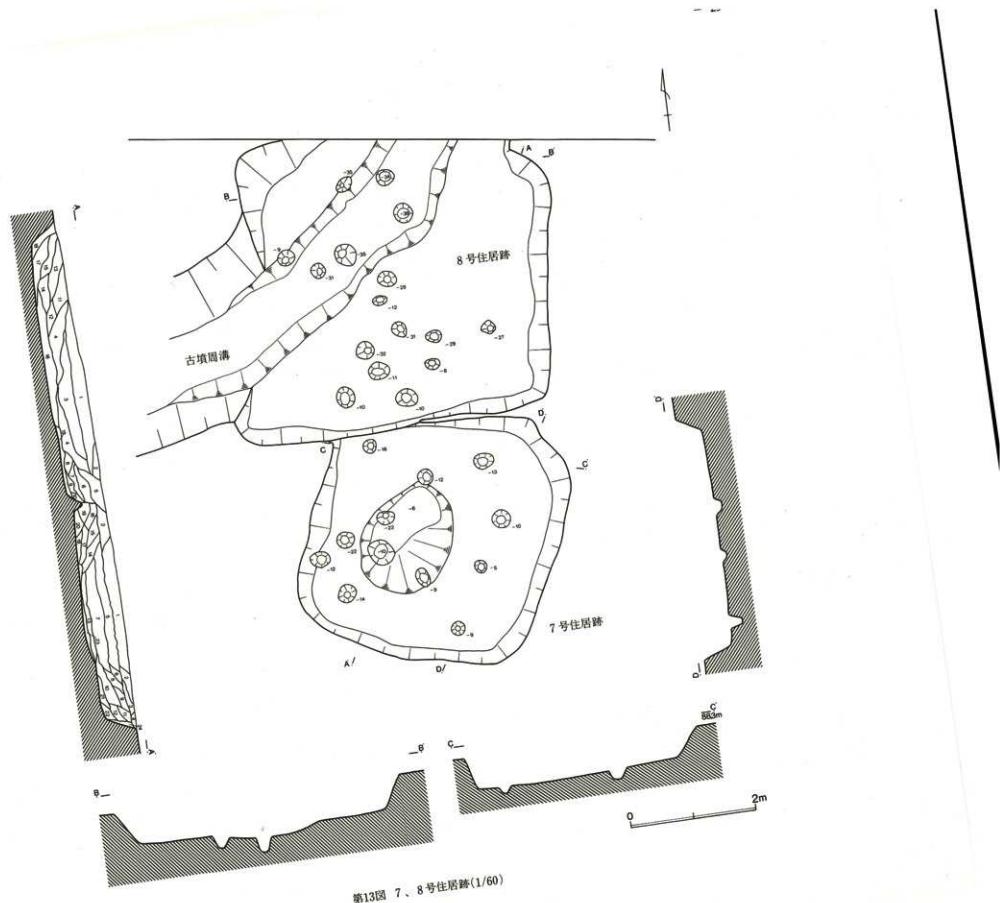
第7層 黒色土である。(漆黒色に近い色調である。炭化物を多量に含有。粘性に富む。)

第8層 黒色土である。(7層より色調が明るい。炭化物の含有が少い。)

第9層 暗褐色土である。(暗い色調である。炭化物、赤色スコリア粒、黄褐色土粒子を含有。)

第10層 暗褐色土である。(明るい色調である。粘性に富む。)

第11層 暗褐色土である。(明るい色調である。炭化物の含有量が多い。)



第13圖 7、8号住居跡(1/60)

- 第12層 黄褐色土である。(軟質であり、暗褐色土のブロック含有。)
- 第13層 暗褐色土である。(11層に近似する。炭化物の含有が少ない。)
- 第14層 黒色土である。(8層より色調は暗い。粘性に富む。黄褐色土のブロックを含有。)
- 第15層 暗褐色土である。(黄褐色土のブロックを含有。粘性に富む。)
- 第16層 茶褐色土である。(色調は暗い。粘性に富む。炭化物、赤色スコリア粒を含有。)
- 第17層 茶褐色土である。(16層より色調は暗い。炭化物を含有。)
- 第18層 黄褐色土である。(軟質である。炭化物の含有量が多い。)
- 第19層 黄褐色土である。(軟質である。色調は暗い。炭化物を含有。)
- 第20層 黄褐色土である。(19層より色調が暗い。炭化物を含有。)
- 第21層 暗褐色土である。(粘性に富む暗褐色土のブロックである。)
- 第22層 黄褐色土である。(20層と同一層である。)
- 第23層 暗褐色土である。(13層より色調が暗い。炭化物の含有無。)
- 第24層 黄褐色土である。(暗褐色土のブロックを含む。)

遺物の出土は、覆土の黑色土から主に検出された。土器は小破片の出土が多い。接合関係を示すものは少ない。石器の出土も土器の出土層位と共に通する。

住居の時期は出土土器から諸磯a式期である。

8号住居跡（第13図）

F-35・36グリッドに位置する。住居の西壁部の中央から北壁部にかけて、古墳周溝が床面に至る深さで重複して切られる。7号住居跡とは南壁部の中央で重複し切っている。保存状態は悪い。

プランは方形を呈する。壁は一辺が5mで、東壁は4mと短く台形状に近い。各コーナー部は若干丸味を備える。壁高は50cm前後で傾斜の強い立ち上がりである。床面は平坦であった。状態は軟弱である。柱穴は16本が検出された。配置は不規則で中央部に集中して検出された。柱穴の深さは浅いもので8cm、深いもので38cmを測る。周溝は検出されていない。炉は不明である。

覆土は19層に分かれる。粘性に富んだ暗褐色土が基本となって充填されていた。

第1層 暗褐色土である。(色調は明るい。粘性に富んで締っている。炭化物、赤色スコリア粒の含有が多い。)

第2層 暗褐色土である。(色調は1層より暗い。他は近似する。)

第3層 暗褐色土である。(2層より色調は暗い。粘性に富む。炭化物の含有が多い。)

第4層 暗褐色土である。(1層に近い色調で明るい。炭化物の含有が多い。)

第5層 暗褐色土である。(色調は4層より明るい。粘性に富む。炭化物、赤色スコリア粒含有。)

第6層 暗褐色土である。(4層より色調が明るい。炭化物の含有が多い。)

第7層 暗褐色土である。(6層に近似する。炭化物の含有が目立たない。)

第8層 茶褐色土である。(色調は暗い。黄褐色土のブロック含有。炭化物の含有が多い。)

第9層 黒色土である。(粘性に富んでいる。含有物は含まない。)

第10層 黄褐色土である。(軟質である。)

第11層 暗褐色土である。(4層に近似する土である。)

- 第13層 暗褐色土である。(4層より色調が若干暗い。他は同一。)
第13層 暗褐色土である。(11層に近似し、色調が若干明るい。炭化物の含有が多い。)
第14層 暗褐色土である。(13層と近似するが、黄褐色土のブロックを含む。)
第15層 暗褐色土である。(14層と共通するが、焼土を含有。)
第16層 茶褐色土である。(色調は暗い。黄褐色土のブロック含む。炭化物の含有量が多い。)
第17層 暗褐色土である。(16層に近似するが、ブロックの含有が少ない。)
第18層 茶褐色土である。(ブロックである。)
第19層 茶褐色土である。(黄褐色土のブロックを含有。)

遺物の出土は、覆土内から均一に検出された。土器の出土量は少ない。無文浅鉢の2個体は南西コーナー一際で床面に接して検出された。石器の出土量は多い。

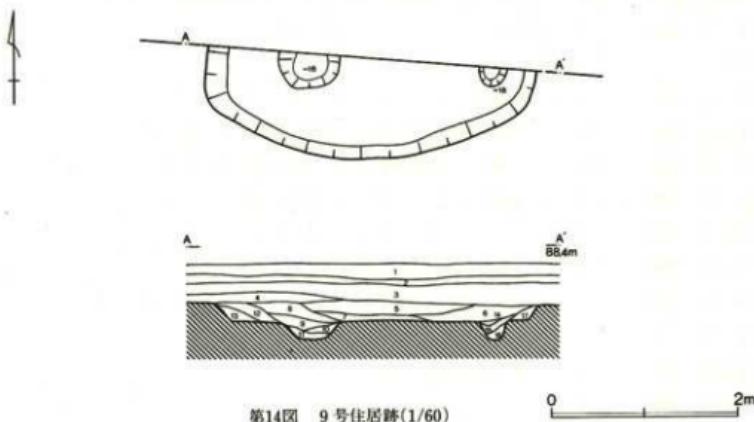
住居の時期は出土土器から諸磯b式期である。

9号住居跡(第14図)

G-37グリッドに位置する。8号住居跡の南で検出された。住居の北側は調査区外にはいる。検出された範囲は全体の1/4程である。

プランは検出された南部分から方形か長方形と思われる。南壁部の形状は若干膨みを示している。コーナー一部は丸味を備えている。壁高は東、南壁では15cm、西壁では20cmを測る。立ち上がりは傾斜が強い。床面は平坦な面であり、状態は軟弱であった。柱穴は2本検出され、共通する位置関係を備え、主柱穴と思われる。深さは共に18cmを測る。柱穴の径が60cmと巾広である。

- 第1層 耕作土である。(色調は茶褐色。ボロボロして粒子が荒い。)
第2層 黒色土である。(1層のブロックを含む。軟質である。)
第3層 暗褐色土であゆ。(色調は明るい。粘性に富む。)
第4層 暗褐色土である。(色調は3層より暗い。粘性を備える。)
第5層 暗褐色土である。(4層より色調は暗い。粘性に富む。炭化物、赤色スコリア粒を含有。)



第14図 9号住居跡(1/60)

- 第6層 暗褐色土である。(5層より色調は若干明るい。含有物は同一。)
- 第7層 茶褐色土である。(色調は暗い。粘性に富む。炭化物、赤色スコリア粒を含有。)
- 第8層 茶褐色土である。(7層より色調明るい。)
- 第9層 茶褐色土である。(8層中に黄褐色土のブロックを含む。)
- 第10層 茶褐色土である。(9層と近似する。黄褐色土のブロックの含有が多い。)
- 第11層 黄褐色土である。(茶褐色土のブロックを含有。)
- 第12層 茶褐色土である。(少しい黄褐色土のブロックを含有。)
- 第13層 黄褐色土である。(色調は暗い。)
- 第14層 黒色土である。(ブロック状である。)
- 第15層 黄褐色土である。(色調は暗い。軟質である。)
- 第16層 黄褐色土である。(ブロックである。)
- 第17層 黄褐色土である。(13層と近似する。)

遺物の出土は土器、石器共に少ない。土器は細片が多く、覆土の上層から検出された。

住居の時期は出土土器が少なく不明瞭であるが諸磯a式期と思われる。

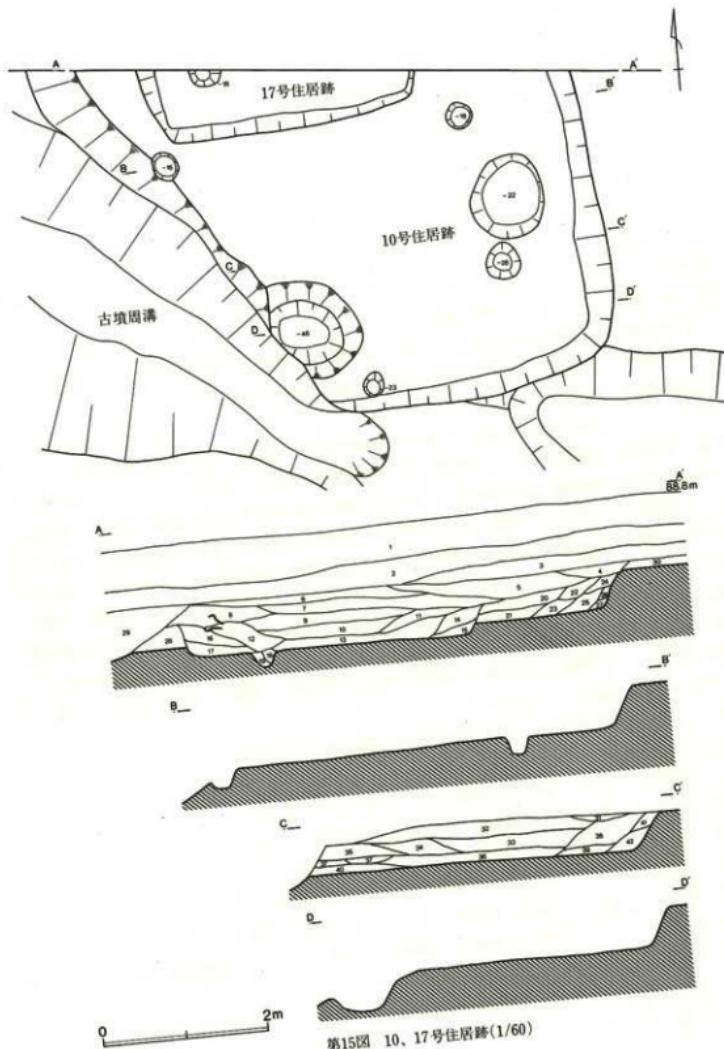
10号住居跡（第15図）

F・G-37・38グリッドに位置する。住居は古墳周溝により西壁から南壁の中央部にかけて切られる。北側は調査区外にはいる。住居内には17号住居跡が重複する。規模の大きいプランを呈す。

壁の検出は東壁の半分と南壁部であり、形状からプランは方形か長方形と思われる。壁は直線であり、東南コーナー部は丸味を備えている。壁高は東壁で46cmを測り、傾斜の有る立ち上がりである。床面は程平坦で一定であり、状態は軟弱であった。床面には柱穴と土壤状の落ち込みが検出された。柱穴は4本が検出され、位置は東壁に寄って2本、南壁際で1本、西側で1本であり、整然と配置され、各々が主柱穴となっている。深さは16~28cmを測る。土壤状の落ち込みは、東側のもので径が1mの円形で深さは22cmを測り、壇底は平坦である。西側では、半分周溝に切られるが、形状は橢円形で深さは46cmを測り深い。壇底は狭い。この落ち込みの覆土は住居内の土層と一致して、住居に附隨した施設と思われる。

覆土は17号住居跡と重複するため、10号住に関する土層について説明する。

- 第20層 茶褐色土である。(色調は明るい。粘性に富む。炭化物の含有が多い。)
- 第21層 茶褐色土である。(20層より色調は明るい。他は同一である。)
- 第22層 茶褐色土である。(色調は暗い。粘性に富む。炭化物の含有が多い。赤色スコリア粒含有。)
- 第23層 茶褐色土である。(21層に近似する。炭化物の含有が多い。)
- 第24層 黄褐色土である。(暗い色調、軟質である。炭化物の含有が多い。)
- 第25層 黄褐色土である。(24層中に黄褐色土の粘性に富んだブロックを含有する。炭化物含有。)
- 第26層 黄褐色土である。(24層より色調が若干明るい。軟質である。炭化物を含有する。)
- 第27層 黄褐色土である。(砂質で軟弱である。)
- 第28層 茶褐色土である。(色調は明るい。粘性に富む。炭化物、赤色スコリア粒を含有。)
- 第29層 古墳周溝の覆土。



- 第30層 暗褐色土である。(基本土層で、縄文土器の遺物包含層である。)
- 第31層 暗褐色土である。(色調は明るい。粘性に富む。炭化物の含有が多い。赤色スコリア粒含。)
- 第32層 茶褐色土である。(明るい色調。粘性有。大粒の炭化物を多量に含む。遺物の出土多い。)
- 第33層 茶褐色土である。(32層より色調が明るい。他は同一である。遺物の出土多い。)
- 第34層 暗褐色土である。(色調は暗い。粘性に富む。炭化物の含有が多い。遺物の出土多い。)
- 第35層 暗褐色土である。(色調は34層より明るい。炭化物の含有が多い。遺物の出土多い。)
- 第36層 暗褐色土である。(色調は明るい。軟質である。炭化物を含む。)
- 第37層 黄褐色土である。(軟質である。炭化物の含有少ない。)
- 第38層 暗褐色土である。(34層に近い色調、粘性に富む。炭化物の含有多い。遺物の出土多い。)
- 第39層 茶褐色土である。(色調は暗い。軟質である。炭化物の含有は少ない。)
- 第40層 黄褐色土である。(色調は暗い。粘性の有る黄褐色土のブロックを含む。炭化物含有。)
- 第41層 茶褐色土である。(色調は明るい。軟質である。炭化物を若干含有。)
- 第42層 黄褐色土である。(軟質である。炭化物を含有。)

遺物の出土は第31~35、38層で集中して検出され、出土量は土器、石器共に多量である。特に32層に含まれる土器は、個体各に検出されている。1の土器は36層中から検出され、破片が広く分布して出土したもので、他の繊維土器と併出したが図示した土器が個体数の全てである。これらの土器は覆土上層の土器とは時間差を示すものであり、住居の時期決定が微妙となるが、個体数が少ないとこと、破片が広範にわたることなどから覆土の堆積過程に混在したものと思われる。

住居の時期は出土土器から諸磯a式期である。

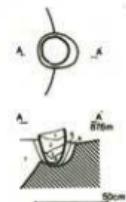
11号住居跡（第16・17図）

F-39グリッドに位置する。古墳周溝により、東南コーナ部を切られ欠失する。北西コーナ一際には59号土壤が位置する。

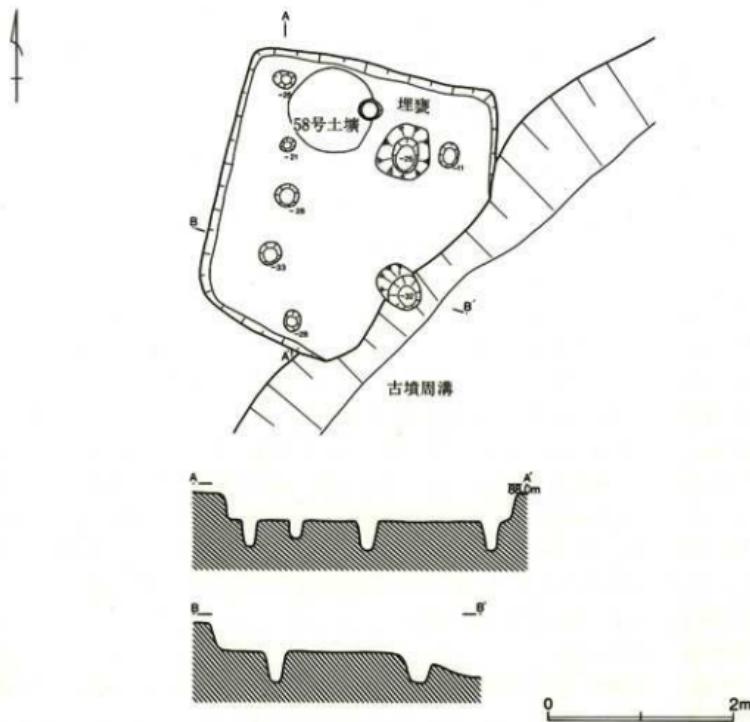
プランは一辺が2.6m程の方形を呈する。南壁は膨みを備える。コーナー部は鋭く曲る。壁高は30cm前後である。立ち上がりは鋭い。床面は平坦であり、状態は軟弱である。柱穴は8本が検出された。柱穴は西壁に沿って4本、南壁に1本、東壁に寄って3本の配置であり、各コーナー部に寄る4本が主柱穴と思われる。深さは11~32cmを測り、25cm前後に深度が集まる。北壁部に寄った中央には埋甕が位置する。埋甕は深鉢の胴部下半を正位に埋め込むものであり、58号土壤を切って作られている。周溝および炉は検出されていない。

埋甕の覆土は6層に分かれる。覆土内と周辺からは焼土の検出はない。

- 第1層 暗褐色土である。(色調は明るい。粘性が有る。僅かに炭化物を含む。)
- 第2層 暗褐色土である。(黄褐色土のブロックを若干含む。炭化物を含む。)
- 第3層 暗褐色土である。(色調は暗い。炭化物を多く含有する。)
- 第4層 黄褐色土である。(暗い色調である。粘性が有る。炭化物は含まない。)
- 第5層 黄褐色土である。(明るい色調である。炭化物を含む。)
- 第6層 黄褐色土である。(5層に近いが、色調は明るい。炭化物を含まない。)
- 第7層 58号土壤覆土。



第16図 埋甕(1/40)



第17図 11号住居跡(1/60)

遺物は浮いた状態で出土した。土器の検出は少なく、石器も同様であった。

住居の時期は出土土器から諸磲 b 式期である。

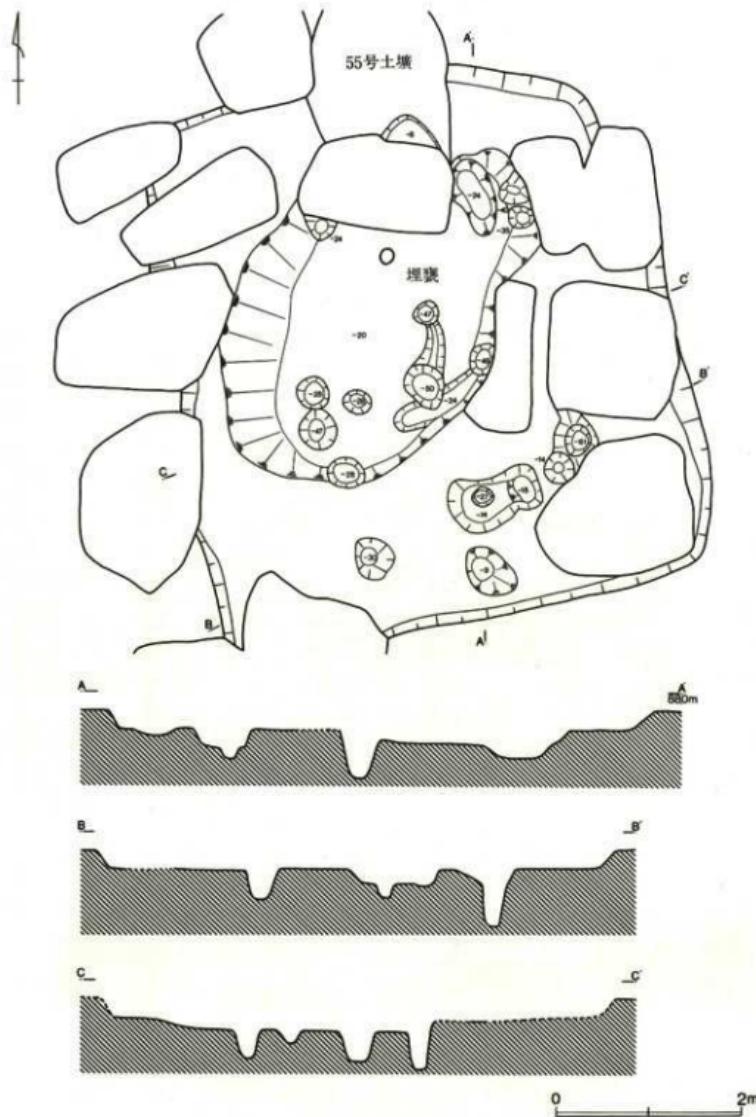
12号住居跡（第18・19図）

F-41・42グッドに位置する。北壁の中央部では55号土塘により切られる。この住居は擾乱を多く受けた壁が検出された部分は断続的であった。保存状態の極めて悪い状態であった。

プランは検出された壁の形状から方形を呈している。壁は北壁、西壁では擾乱を多く受けたが、南壁と東壁の一部は形状を留めていた。壁の一辺は約5mで直線的な形状を示し、コーナー部は丸味を備えている。壁高は25cmを測り、傾斜の強い立ち上がりであった。床面の状態は軟弱で、東壁部側は高くなり西壁に向って低くなっている。中央部には橢円形を呈す落ち込みが検出された。この覆土は暗い黄褐色土で若干の炭化物を含んでいた。深さは20cmを測り、皿状に掘り窪めている。北側では埋甕が検出された。柱穴は不規則な配置で多数検出されたが、擾乱が多く主柱穴等の認定は不明である。

柱穴は深さは9~47cmのものであった。炉と思われる焼土は確認されていない。

第18図 埋甕(1/40)



第19図 12号住居跡(1/60)

埋甕は深鉢の底部を正位に置くもので掘り方を一部残していた。埋甕の周辺部でも擾乱が激しく詳細は不明であった、埋甕に係る土層状態は炭化物を含んだ2層に分かれる。

第1層 黄褐色土である。(色調は暗い。粘性は少なくボロボロしている。若干の炭化物含有。)

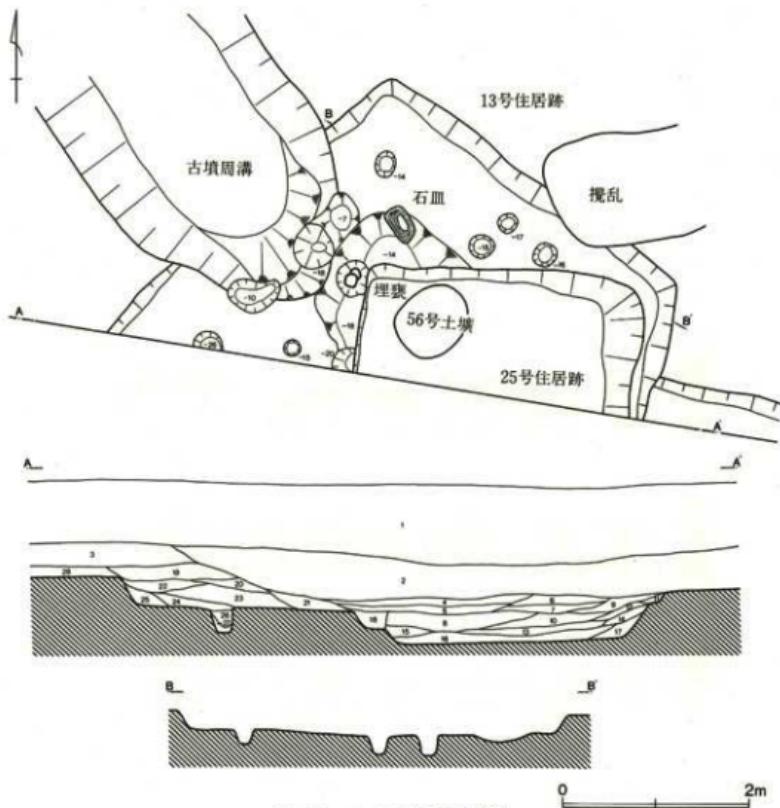
第2層 黄褐色土である。(1層より色調は明るい。粘性は少ない。炭化物を若干含有。)

遺物の出土は擾乱が激しいわりには多く検出された。土器は覆土上層で東壁側で出土が多い。下層では破片の小さい土器が検出された。石器の出土は少ない。

住居の時期は出土土器から諸磯a式期である。

13号住居跡 (第20・21図)

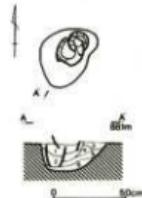
D-42グリッドに位置する。住居の南側は調査区外にはいる。検出された範囲は北西コーナー一部を除き、古墳周溝と重複するが、入り込みが深く床面は残存し検出された。更に住居内からは25号住居跡が検出され重複している。



第20図 13、25号住居跡(1/60)

プランは検出された範囲から方形もしくは長方形と思われる。南壁部の形状は直線的に検出され、4mを測る。コーナー部は鋭い形態を示してきる。壁高は西壁で30cm、北壁で25cmを測る。壁の立ち上がりは傾斜を備えている。床面は平坦であった。状態は軟弱な面であった。床面には11本の柱穴が検出された。柱穴の配置は、西壁部の北、南側ほものは主柱穴と思われる。各柱穴の深さは7~26cmを測る。床面の中央部には東側を切られる橢円状の落ち込みが検出され、北側に埋甕が配置されていた。この埋甕は、不整形の掘り方内に1個体の深鉢が、胴上半を境に各々分かれて正位の状態で検出された。

第21図 埋甕(1/40)



覆土は茶褐色土を基本に堆積していた。

第1層 表土である。

第2層 古墳周溝の覆土である。

第3層 黒褐色土である。(色調は明るい。粘性は少ない。)

第10層 暗褐色土である。(黄褐色土のブロックを含む。暗い色調である。軟質である。炭化物を含む。)

第21層 暗褐色土である。(20層より色調は明るい。粘性に富む。炭化物の含有が多い。)

第22層 茶褐色土である。(色調は暗い。粘性に富む。炭化物を含む。)

第23層 茶褐色土である。(色調は明るい。粘性に富む。炭化物を含む。)

第24層 茶褐色土である。(23層より色調は明るい。炭化物赤色スコリア粒を有する。)

第25層 黄褐色土である。(色調は暗い。若干の炭化物を含有する。)

第26層 黄褐色土である。(暗褐色土のブロックを斑点状に含有する。)

第27層 黄褐色土である。(色調は明るい。暗褐色土のブロックを含有しない。若干の炭化物含。)

埋甕と掘り方の覆土を説明する。6層に分かれ焼土は含まれていない。

第1層 黄褐色土である。(色調は暗い。軟質である。炭化物を含む。)

第2層 黄褐色土である。(1層に近いが炭化物を含まない。)

第3層 茶褐色土である。(色調は明るい。粘性がある。)

第4層 摂乱である。

第5層 黄褐色土である。(茶褐色土のブロックを含有する。)

第6層 黄褐色土である。(明るい色調である。5層よりブロックの含有が少ない。)

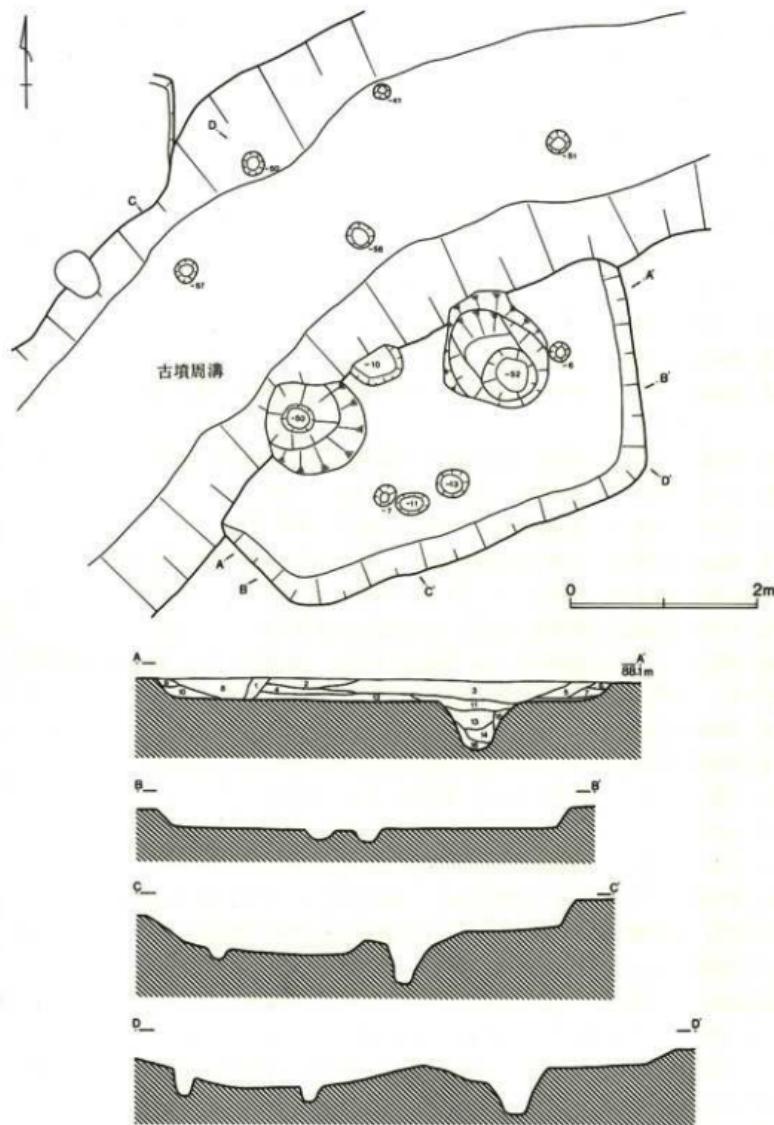
遺物の出土は、古墳周溝の存在により少ない。石皿は床面に接して検出された。

住居の時期は出土土器から諸磯a式期である。

14号住居跡（第22図）

F-38・39グリッドに位置する。古墳周溝に北側半分を切られ欠失している。

プランは長方形と思われる。南壁は4mを測る。東、西壁部の形状は膨んでいる。コーナー部は丸味を備えている。壁高は南壁で30cm、東、西壁部で25cmを測る。壁の立ち上がりは傾斜が強い。床面は平坦な面として検出され、状態は軟弱であった。床面には柱穴と土壤状の掘り込みが検出された。柱穴は南壁際に3本が繰って見られ、古墳周底から5本が検出された。柱穴の深さは共に深



第22図 14号住居跡(1/60)

くしっかりとしている。土壤状の落ち込みは共に径が大きく、底径は小さいもので、深さは50、52cmを測り形態は共通している。性格は住居に関連する施設と思われる。周溝および炉は検出されていない。

覆土は16層に分かれる。土壤状の落ち込みと覆土の堆積状態は住居の埋没と同一過程を示す。

第1層 攪乱である。

第2層 暗褐色土である。(色調は明るい。軟質である。赤色スコリア粒を含有する。)

第3層 暗褐色土である。(色調は暗い。軟質である。炭化物、赤色スコリアを含有する。)

第4層 暗褐色土である。(3層より色調は明るい。赤色スコリア、黄褐色土粒子、炭化物含有。)

第5層 暗褐色土である。(2層に近似する。茶褐色土のブロックを含有する。)

第6層 黄褐色土である。(ブロックである。)

第7層 暗褐色土である。(茶褐色土のブロックを含有する。)

第8層 茶褐色土である。(色調は暗い。軟質である。)

第9層 黄褐色土である。(6層と同一である。)

第10層 暗褐色土である。(黄褐色土のブロックを含む。炭化物を含有する。)

第11層 茶褐色土である。(色調は暗い。軟質である。赤色スコリア粒、炭化物を含有する。)

第12層 茶褐色土である。(11層中に黄褐色土のブロックを斑点状に含有する。)

第13層 茶褐色土である。(色調は11層より明るい。炭化物を含む。)

第14層 茶褐色土である。(色調は明るい。黄褐色土のブロック、炭化物を含有する。)

第15層 黄褐色土である。(ブロックである。)

第16層 茶褐色土である。(色調は明るい。赤色スコリア粒、炭化物を含有する。)

遺物の出土は少ない。土器は床面から10cm程浮いた状態であるが、南壁部では高いレベル、北側では床に近いレベルで出土した。破片は覆土内に拡がり接合したものである。

住居の時期は出土土器から諸磧a式期である。

15号住居跡 (第23・24図)

E・F-40グリッドに位置する。東南壁のコーナー部では竪穴遺構と重複して切られている。

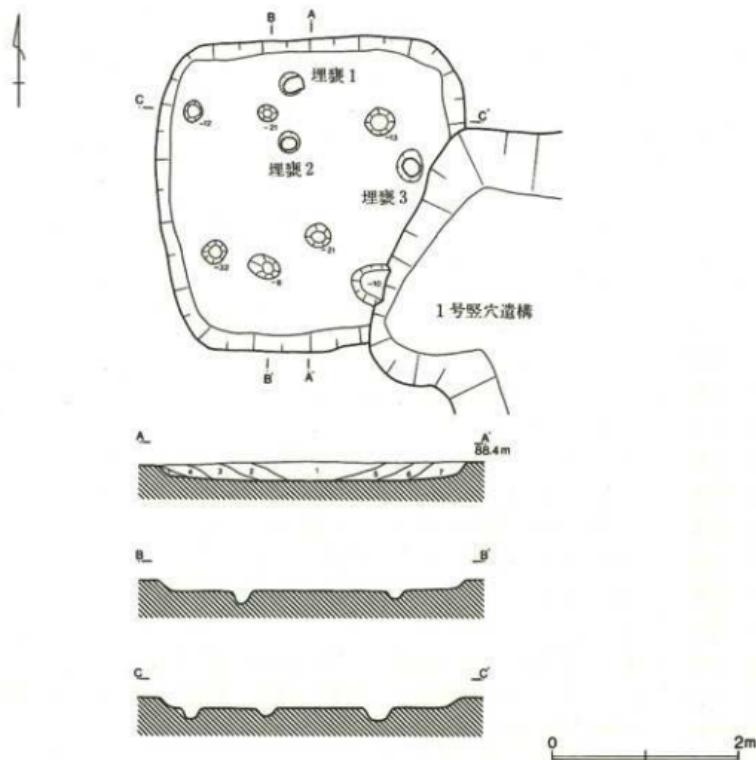
プランは長方形である。壁の形状は直線的に検出された。西壁は3m、北壁は2.5mを測る。各コーナー部は丸味を備えて隅丸となっている。壁高は北、西壁で15cm、南壁が10cmと掘り込みは浅い。床面は各壁際が高くなっている、状態は軟弱な面であった。床面には柱穴が7本検出された。北壁寄りと南壁寄りの柱穴は直線状に列んでいる各柱穴の深さは浅いもので10cm、深いもので32cmを測る。床面には埋甕が3ヶ所に配置されていた。埋甕は共に口縁および胴下半を欠失する深鉢を正位に設置するもので、掘り方は埋甕2が深くしっかりとしていた。周溝および炉と思われる焼土の検出はできず不明である。

覆土は7層に分かれる。

第1層 暗褐色土である。(色調は暗い。粘性に富む。炭化物、赤色スコリア粒を含む。)

第2層 暗褐色土である。(1層より色調は明るい。粘性に富む。赤色スコリア粒、炭化物含有。)

第3層 暗褐色土である。(色調は2層より明るい。含有物は同一である。)



第23図 15号住居跡(1/60)

第4層 茶褐色土である。(色調は暗い。含有物は目立たない。)

第5層 暗褐色土である。(2層と同一層である。)

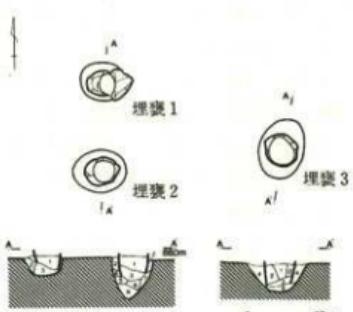
第6層 暗褐色土である。(色調は明るい。炭化物を含有する。)

第7層 茶褐色土である。(色調は明るい。炭化物を含有する。)

埋甕の覆土を説明する。炭化物は含有するが、焼土は検出されていない。

埋甕 1

第1層 茶褐色土である。(色調は暗い。粘性に富む。炭



第24図 15号住居跡埋甕(1/40)

化物を若干含有する。)

第2層 黄褐色土である。(色調は暗い。粘性が有。)

第3層 黄褐色土である。(2層に近似するが、色調が若干暗い。)

埋甃 2

第1層 暗褐色土である。(色調は明るい。粒子が荒い。炭化物を含む。)

第2層 暗褐色土である。(1層中に黄褐色土のブロックを含有。)

第3層 暗褐色土である。(1層に近いが炭化物を含まない。)

第4層 暗褐色土である。(2層に近似する。ブロックの含有が少ない。)

第5層 黄褐色土である。(色調は暗い。暗褐色土のブロックを含有。)

第6層 黄褐色土である。(色調は暗い。)

第7層 黄褐色土である。(6層より色調が明るい。)

第8層 黄褐色土である。(7層より色調は明るい。粘性が有る。)

埋甃 3

第1層 茶褐色土である。(明るい色調である。軟質である。)

第2層 暗褐色土である。(色調は暗い。粘性を備える。)

第3層 暗褐色土である。(明るい色調である。粘性がある。黄褐色土のブロックを含有。)

第4層 黄褐色土である。(暗い色調である。粘性はある。炭化物を若干量含有する。)

第5層 黄褐色土である。(ボロボロしている。)

遺物の出土は多い。全体に床面から5cm程浮いた状態で分布していた。特に東側に寄って密集して検出された。復原個体の多くは繋って検出された。石器の出土量は少ないが礫が多数含まれていた。

住居の時期は出土土器から諸磯a式期である。

16号住居跡（第25図）

D・E-33・34グリッドに位置する。後期初頭の大型住居である。住居の覆土内からは、大型で不整形の河原石が馬蹄形状に配された状態で検出された。出入口部は風倒木痕により大きい範囲で搅乱を受けて検出は不明となっていた。壁外には柱穴が多数検出された。この住居は特殊な性格を潜めたものである。

プランは東西径が8.5m、南北径が8mを測り、南側では込んだ形態でD字状に近いものである。壁高は北、東側で30cm西側で20cm、南側では15cmを測る。壁の立ち上がりは直線的に検出されたが、南側は掘り込みが浅く、搅乱を受けることから不明瞭な部分が多い。床面は平坦であった床面の状態は軟弱であった。床面には柱穴が多数検出された。壁に沿っては等間隔に配置されている。他の柱穴は不規則であるが、炉を中心同心円状に配置されている。炉の南では直線的に列んで柱穴が見られ、出入口部と関連するものと思われる。深さは浅いもので6cm、深いもので37cmを測る。炉は南に片寄って位置する。掘り方はしっかりとしている。壁外の柱穴は南側を除いて整然と配置されている。深さは確認面から14~40cmを測る。

覆土内の配石は、壁際のものは全体に高く、内に入つて床面に接し、傾斜を示す状態である。石

は扁平なものは無く、大型で不整形の河原石のものが殆んどであり、敷石とは區別される状況であった。この石は、住居の埋没過程の初期の段階で、流入または人為的に配置されたものと思われる。

住居の覆土は16層に分かれれる。壁際の堆積を観察すると等1次の埋没が終了した土層中に石が含まれている。

- 第1層 暗褐色土である。(色調は明るい。径5mmの黄褐色土のブロックを含む。)
- 第2層 茶褐色土である。(色調は暗い。粘性は少ない。炭化物を含む。)
- 第3層 暗褐色土である。(色調は暗い。粘性は少ない。炭化物の含有量が多い。)
- 第4層 茶褐色土である。(色調は明るい。炭化物を含有する。)
- 第5層 暗褐色土である。(3層に近似する。色調が若干明るい。)
- 第6層 暗褐色土である。(5層に近似する。炭化物の含有量が多い。)
- 第7層 暗褐色土である。(6層中に黄褐色土のブロックを含有する。)
- 第8層 黄褐色土である。(色調は暗い。軟質である。)
- 第9層 茶褐色土である。(4層に近似する。炭化物を含有する。)
- 第10層 茶褐色土である。(黄褐色土のブロックを含有する。)
- 第11層 黄褐色土である。(8層と同一層である。)
- 第12層 暗褐色土である。(色調は暗い。粘性に富む。炭化物を含有する。)
- 第13層 暗褐色土である。(色調は暗い。炭化物の含有量が多く、焼土のブロックを含む。)
- 第14層 暗褐色土である。(色調は暗い。炭化物を含む。)
- 第15層 焼土(ブロックで一層である。)
- 第16層 暗褐色土である。(1、2層より色調は暗い。炭化物を若干量含有する。)
- 第17層 暗褐色土である。(色調は明るい。粘性がある。赤色スコリア粒を含有。)
- 第18層 暗褐色土である。(17層より色調は明るい。)
- 第19層 暗褐色土である。(色調は明るい。赤色スコリア粒を含有する。)
- 第20層 茶褐色土である。(色調は暗い。)
- 第21層 茶褐色土である。(色調は明るい。軟質である。)
- 第22層 黄褐色土である。(茶褐色土のブロックを含有する。)

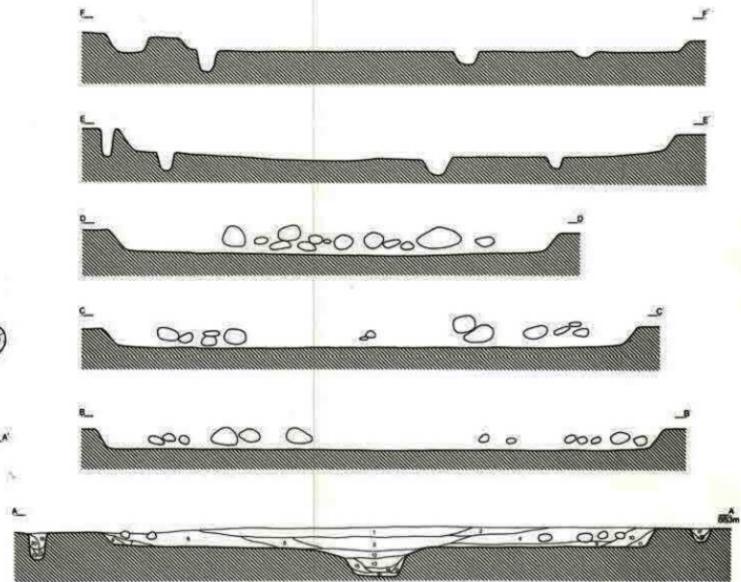
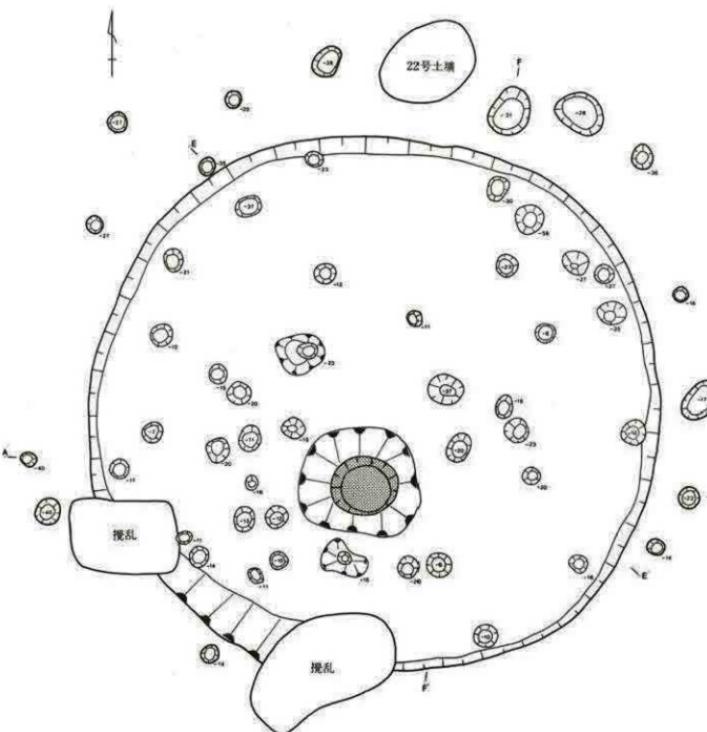
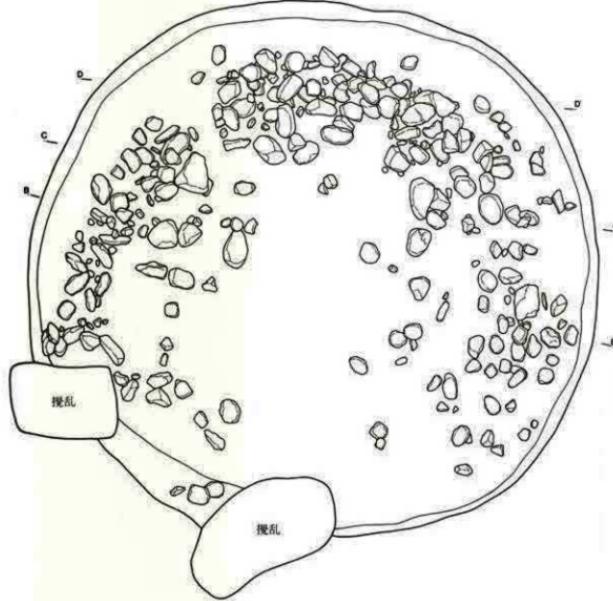
遺物の出土は少なく、土器は40片である。時期は称名寺式が殆んどであったが、炉内から圓化した深鉢が出土した。

住居の時期は炉出土土器から壠ノ内II式期である。

17号住居跡(第15図)

G-38グリッドに位置する。10号住居跡と重複する。検出された範囲は南側の一部分であり北側は調査区外に入る。

プランは検出範囲が狭く方形か長方形と思われる。南壁は直線的である。コーナー部の形状は鋭い。壁高は東壁部で10cm、西、南壁部で15cmを測る。床面は平坦であった。状態は軟弱である。柱穴は1本が検出された。深さは18cmを測る。覆土の観察により東、西壁の立ち上がりが確認された。住居の覆土は1~20層に分けられた。



第25図 16号住居跡(1/60)

- 第1層 表土である。
- 第2層 茶褐色土である。(暗い色調である。軟質である。)
- 第3層 黒褐色土である。(明るい色調である。粘性を備える。)
- 第4層 茶褐色土である。(色調は暗い。粘性有る。)
- 第5層 暗褐色土である。(明るい色調。粘性有る。炭化物を含有する。)
- 第6層 暗褐色土である。(色調は5層より暗い。粘性に富む。炭化物を含有する。)
- 第7層 暗褐色土である。(色調は6層より暗い。他は同一。)
- 第8層 暗褐色土である。(6、7層の中間的な色調である。他は同一。)
- 第9層 暗褐色土である。(色調は明るい。粘性に富む。炭化物、赤色スコリア粒を含有する。)
- 第10層 暗褐色土である。(9層に近似する。炭化物の含有量が多い。)
- 第11層 茶褐色土である。(色調は10層より明るい。他は近似する。)
- 第12層 茶褐色土である。(色調は暗い。粘性に富む。炭化物を含有する。)
- 第13層 茶褐色土である。(12層より色調は明るい。炭化物の含有が多く。)
- 第14層 茶褐色土である。(13層より色調は明るい。赤色スコリア粒含有。炭化物の含有量多い。)
- 第15層 茶褐色土である。(14層に近似するか若干明るい。他は同一である。)
- 第16層 茶褐色土である。(12層より色調は暗い。赤色スコリア粒、炭化物を含有。)
- 第17層 茶褐色土である。(16層中に黄褐色土のブロックを含む。)
- 第18層 暗褐色土である。(色調は明るい。粘性有る。)
- 第19層 茶褐色土である。(色調は明るい。)
- 第20層 茶褐色土である。(色調は明るい。軟質である。)

遺物の出土は少ない。1の深部は覆土の上層で出土した。他の土器も高いレベルで検出された。

住居の時期は出土土器から諸磯b式期である。

18号住居跡（第26・27図）

E-35グリッドに位置する。西南壁コーナー部と西北壁コーナー部は攪乱を受ける。住居内には114、130号土壤が存在し切られている。

プランは方形を呈し、壁は3.5mを測る。各コーナー部は鋭い形状を示している。壁高は10cmと大きい。床面は軟弱であり平坦な面で検出された。床面には柱穴が17本検出された。主柱穴は不明であり不規則な配置であった。柱穴の深さは6~53cmを測る。北壁に寄った中央部から埋甕が検出された。この埋甕は底部であった。炉および周溝は検出されていない。

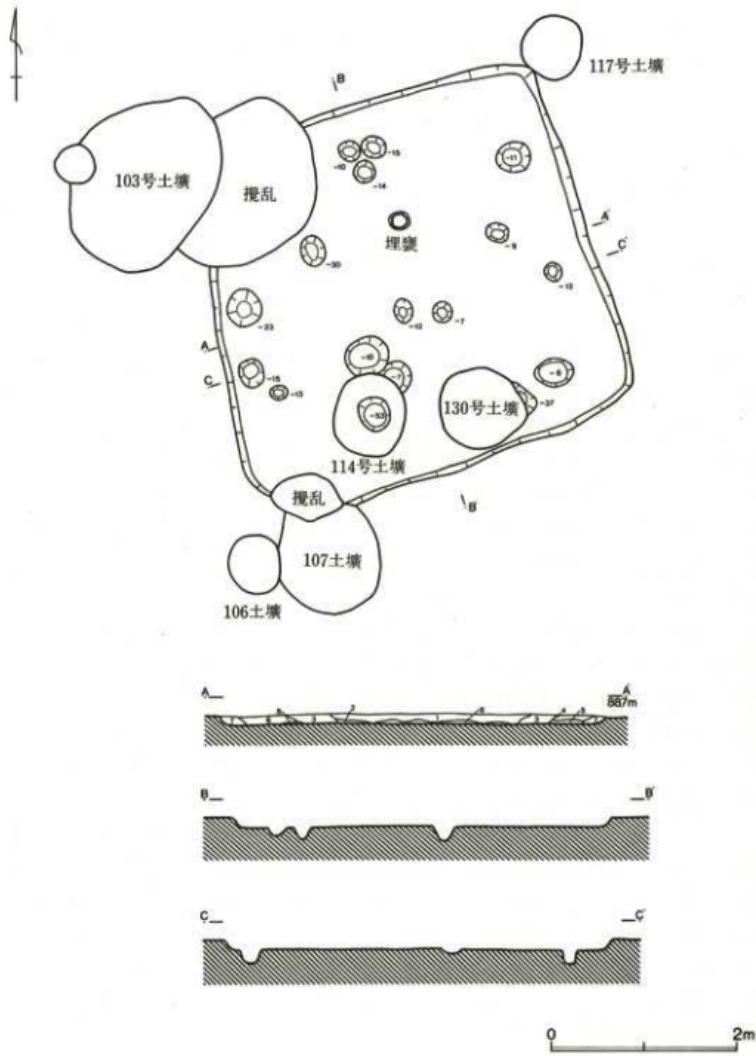
覆土は8層に分かれれる。

第1層 暗褐色土である。である。(色調は明るい。黄褐色土のブロックを含有、粘性が有る。炭化物を含む。)

第2層 暗褐色土である。(1層に近似するが、黄褐色土ブロックの含有が多い。)

第3層 暗褐色土である。(2層より黄褐色土のブロックの含有が多い。)

第4層 茶褐色土である。(色調は明るい。粘性に富む。炭化物含有する。)



第26図 18号住居跡(1/60)

第5層 暗褐色土である。(2層に近似する。)

第6層 暗褐色土である。(色調は暗い。炭化物を含有する。)

第7層 黄褐色土である。(色調は暗い。)

第8層 黄褐色土である。(黄褐色土のブロックで一層。)

埋甕の覆土を説明する。

第1層 暗褐色土である。(住居覆土の2層と同一である。)

第2層 暗褐色土である。(暗い色調である。黄褐色土のブロックを含む。軟質である。)

遺物の出土は土器、石器共に少ない。

住居の時期は出土土器から諸磯a式期である。

19号住居跡 (第28図)

D-35・36グリッドに位置する。25号住居跡と重複して、壁と床面の一部分が遺存していた。120、129号土壤に切られる。

プランは一辺が4mの方形である。壁は直線的である。各コーナー部は丸味を備えている。壁高は10cm前後を測る立ち上がりは傾斜を備えている。床面は軟弱であった。柱穴は南東部壁に張り出し状に検出され、北西コーナー部に1ヵ所検出された。深さは6cmと30cmを測る。周溝は検出されていない。

覆土は16層が相当する。

第16層 黄褐色土である。(色調は暗い。粘性に富む。炭化物を含有する。)

出土遺物は少ない。

住居の時期は出土土器から諸磯b式期である。

20号住居跡 (第29図)

E-30グリッドに位置する。古墳周溝が東壁中央部から南西コーナー部にかけて重複するが、保存状態は良好で、覆土内から多量の遺物が検出された。

プランは東壁が3.8mで、西壁部は2mの台形状を呈し、各コーナー部は丸味を備えた隅丸方形である。壁高は西壁で50cm、北壁は30cmと低くなっている。北壁部の上場には住居跡覆土の抜がりが認められた。壁の立ち上がりは傾斜をもって検出されたが、西壁は特に傾斜が強い。床面は程平坦であるが、状態は軟弱であった。柱穴の検出は8本であり、東側半部で6本、西壁に接して2本であった。深さは浅いもので6~14cmの深度を示している、配置は不規則であり主柱穴等の確認は不明である。周溝、炉の検出はなかった。

覆土は16層に分かれる。覆土内からは多くの遺物が出土して、床面から10cm程浮いた状態である。

第1層 暗褐色土である。(色調は暗い。粘性に富んでいる。炭化物の含有が多い。赤色スコリア粒を含有。)

第2層 暗褐色土である。(色調は1層より暗い。粘性に富む、炭化物、赤色スコリア粒含有。)

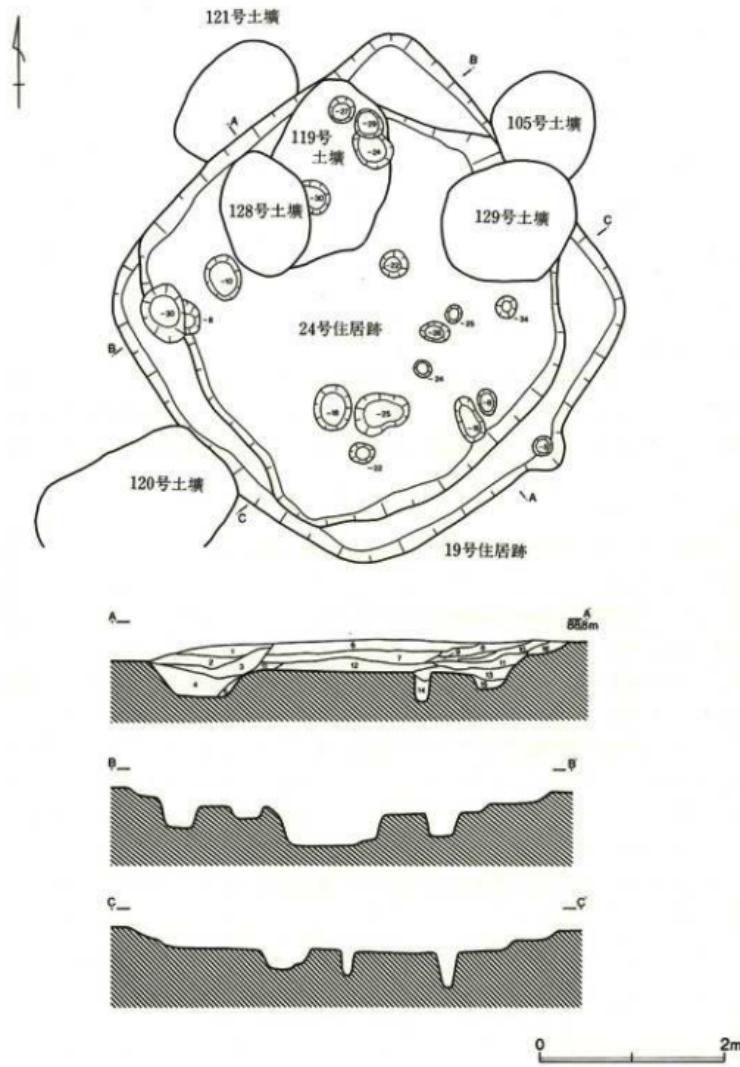
第3層 暗褐色土である。(2層に近似するが若干色調が明るい。炭化物の含有が少ない。)

第4層 暗褐色土である。(2、3層の中間的な色調である。炭化物の含有が少ない。)

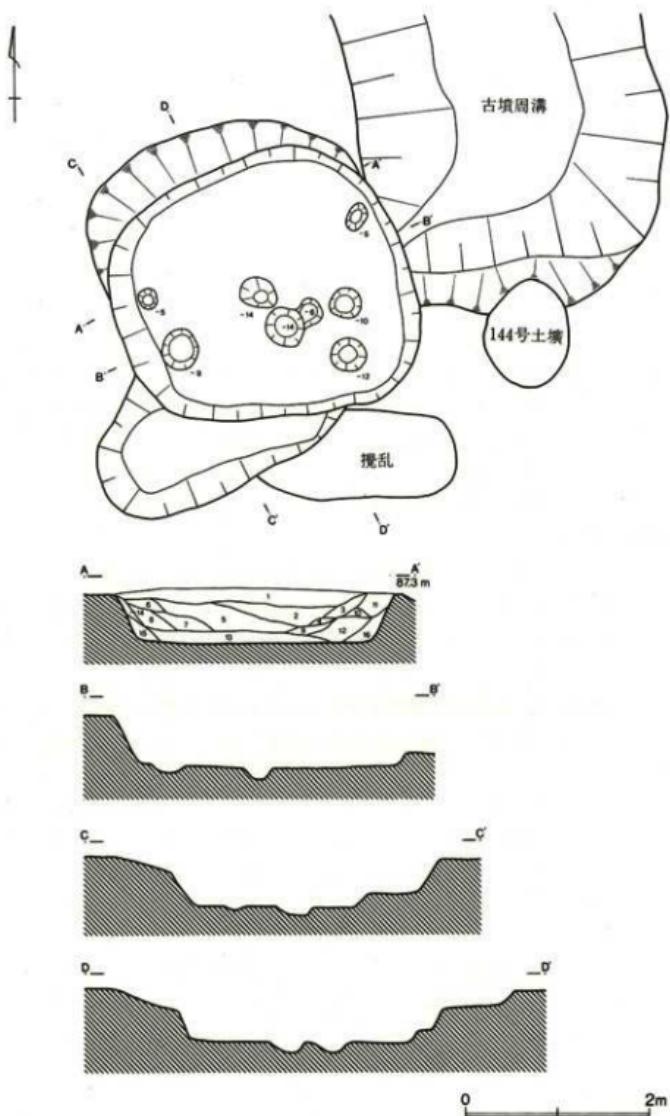
第5層 暗褐色土である。(明るい色調である。粘性に富む。炭化物の含有が多い。)



第27図 埋甕(1/40)



第28図 19・24号住居跡(1/60)



第29図 20号住居跡(1/60)

- 第6層 暗褐色土である。(5層内に黄褐色土のブロックを含有する。)
第7層 暗褐色土である。(5層より色調は明るい。粘性に富む。炭化物の含有が多い。)
第8層 暗褐色土である。(4層と同一層である。)
第9層 暗褐色土である。(色調は7層より色調が明るい。黄褐色土のブロックを含む。)
第10層 黄褐色土である。(黄褐色土のブロックである。)
第11層 茶褐色土である。(色調は暗い。粘性に富む。黄褐色土のブロックを含有する。)
第12層 茶褐色土である。(11層より色調は明るい。黄褐色土のブロックの含有が多い。炭化物無。)
第13層 茶褐色土である。(11層より色調は暗い。黄褐色土のブロック含有。軟質である。)
第14層 黄褐色土である。(色調は暗い。ブロック状である。)
第15層 茶褐色土である。(色調は明るい。黄褐色土のブロックを含む。)
第16層 黄褐色土である。(色調は暗い。粘性が有る。茶褐色土のブロックを含む。)

遺物の出土は土器、石器共に多量に検出された。遺物を含んだ覆土は、暗褐色、茶褐色土とした土層からで、北壁部では高いレベルで、南壁部に向って低いレベルで床面から10cm程浮く状態で傾斜を示して、大型破片と個体各に折り重なった状況で出土したものである。石器も同様であり、覆土からは大型の礫等も多く検出されている。

住居の時期は出土土器から諸磯式期である。

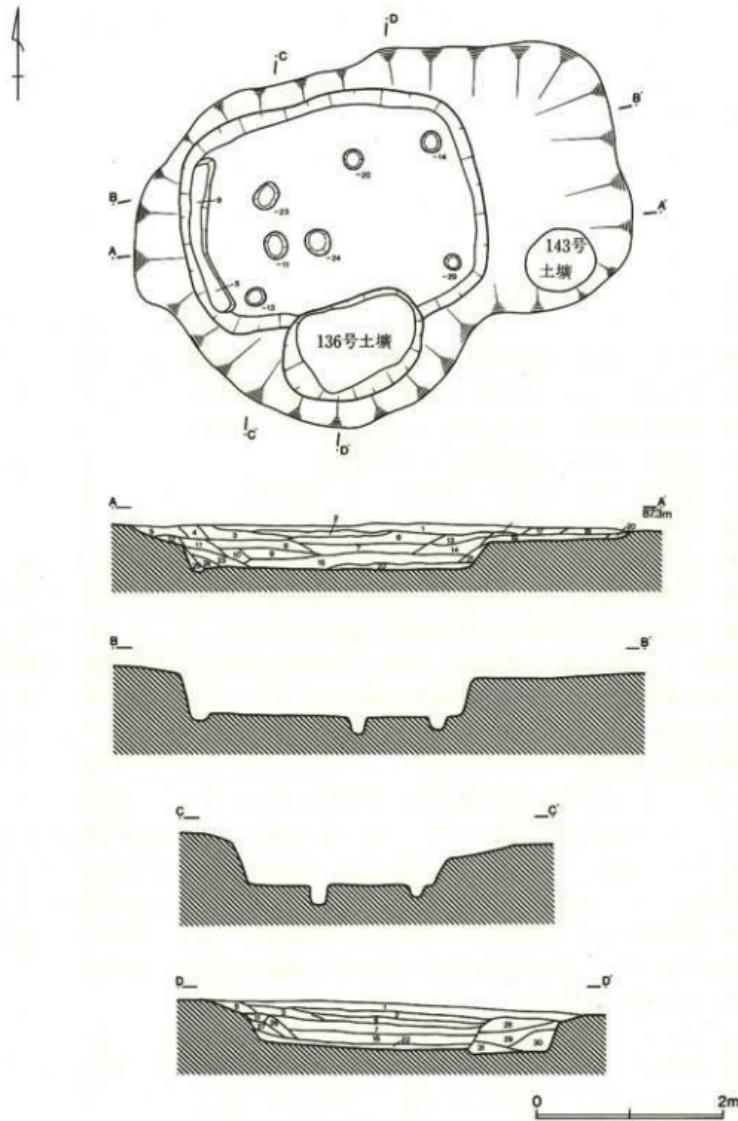
21号住居跡（第30図）

D-29・30グリッドに位置する。南壁の中央部では136号土壤と重複して土壤を切っている。

プランの確認段階では、覆土となる暗褐色土が広い範囲で抜がって、この土層を掘り下げた結果、住居および土壤の存在が確認された。周辺部の落ち込みは、土層状態の観察から覆土の堆積過程で形成されたものと思われる。

プランは長方形を呈す。長辺となる北壁は3m、短辺である東、西壁は2mを測る。壁の形状は若干膨みを示している。各コーナー部は刃形を備えて隅丸となっている。壁高は北壁が50cmで南壁は30cmである。壁の立ち上がりは傾斜を備えている。床面は西半分は平坦であるが、東側に向って少し低くなっている。状態は軟弱であり明瞭に見えられていない。床面には7本の柱穴が検出されている。南西コーナー部を除いて各コーナー部際には柱穴が配され、他の柱穴は西側に寄って不規則に配置されている。各柱穴の深さは11~29cmを測る。周溝は部分的で西壁部で検出された。巾は15cmで一定であり、深さは北側が深く9cm、南側は5cmと浅くなっている。炉は検出されていない。覆土は27層に分かれる。

- 第1層 暗褐色土である。(色調は暗い。固く締っている。炭化物、赤色スコリア粒を含む。)
第2層 暗褐色土である。(1層より暗い。炭化物の含有が多い。)
第3層 暗褐色土である。(1層より色調が明るい。炭化物、赤色スコリア粒を含む。)
第4層 暗褐色土である。(3層より色調が明るい。炭化物が目立たない。)
第5層 茶褐色土である。(色調は暗い。暗褐色土のブロックを含有。)
第6層 暗褐色土である。(2層より色調が暗い。黄褐色土のブロックを含む。炭化物含有多い。)
第7層 茶褐色土である。(色調は暗い。固く締っている。炭化物の含有が多い。)



第30図 21号住居跡(1/60)

- 第8層 暗褐色土である。(3層より色調は明るい。炭化物、赤色スコリア粒含有。)
- 第9層 茶褐色土である。(7層より色調は明るい。炭化物の含有が多く、赤色スコリア粒含む。)
- 第1層 黄褐色土である。(9層より色調が暗い。炭化物を含有。)
- 第11層 黄褐色土である。(10層より暗い色調である。炭化物を若干量含む。)
- 第12層 暗褐色土である。(色調は明るい。黄褐色土のブロックを含む。炭化物を含有。)
- 第13層 暗褐色土である。(6層より色調は明るい。黄褐色土のブロック、炭化物を含有する。)
- 第14層 黄褐色土である。(10層に近い色調である。炭化物を若干含有する。)
- 第15層 茶褐色土である。(色調は暗い。固く締っている。硬質の黒色土のブロックを若干含む。炭化物の含有量が多い。)
- 第16層 茶褐色土である。(色調は暗い。炭化物を含む。)
- 第17層 暗褐色土である。(色調は明るい。黄褐色土のブロックを班点状に含む。炭化物含有。)
- 第18層 暗褐色土である。(25層に近似する色調で、ブロックの含有が無い。)
- 第19章 茶褐色土である。(色調は暗い。粘性に富む。炭化物を含有する。)
- 第20層 黄褐色土である。(暗い色調である。暗褐色土のブロックを含有。)
- 第21章 茶褐色土である。(色調は明るい。炭化物を含む。)
- 第22層 茶褐色土である。(15層より色調は明るい。炭化物を含む。)
- 第23層 茶褐色土である。(色調は明るい。炭化物は若干量含む。)
- 第24層 茶褐色土である。(23層より色調は明るい。粘性がある。炭化物は若干量含んでいる。)
- 第25層 黄褐色土である。(24層より色調は明るい。炭化物を含有する。)
- 第26層 茶褐色土である。(色調は暗い。炭化物を含有する。)

遺物の出土は、北側に寄って検出され、床面から10cm程浮いた状態で、個体各に纏っていた。石器も同様な範囲で検出された。礫の出土が多かった。

住居の時期は出土土器から諸磯b式期である。

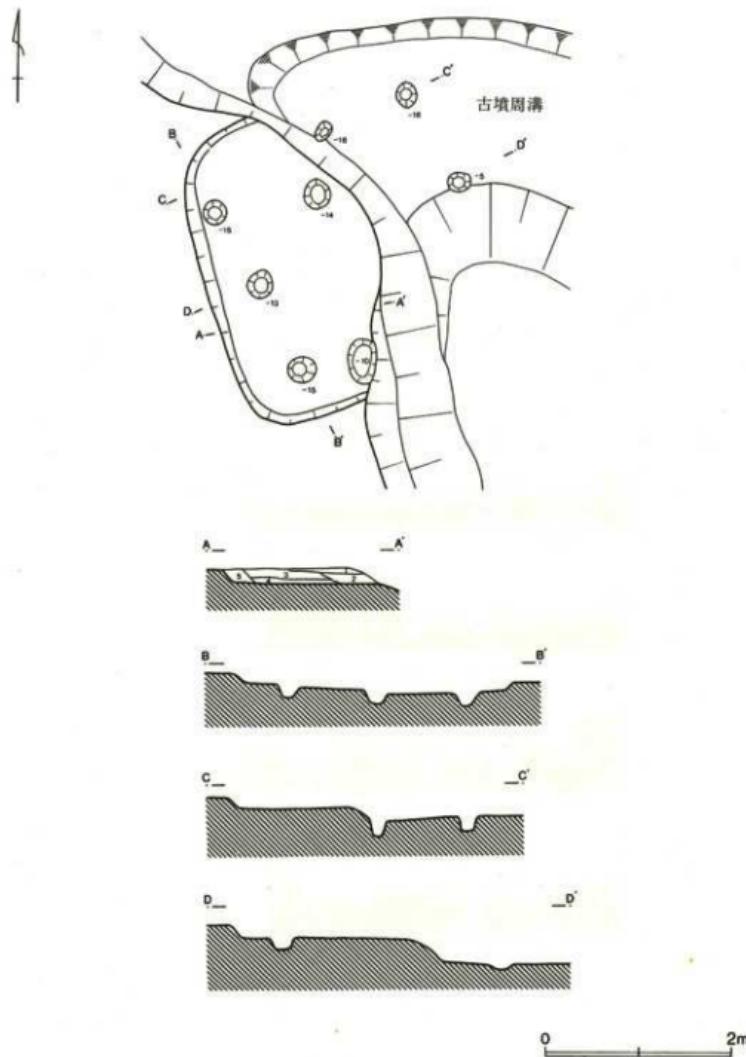
22号住居跡（第31図）

E-30グリッドに位置する。古墳周構と重複して東側半分を切られ欠失している。

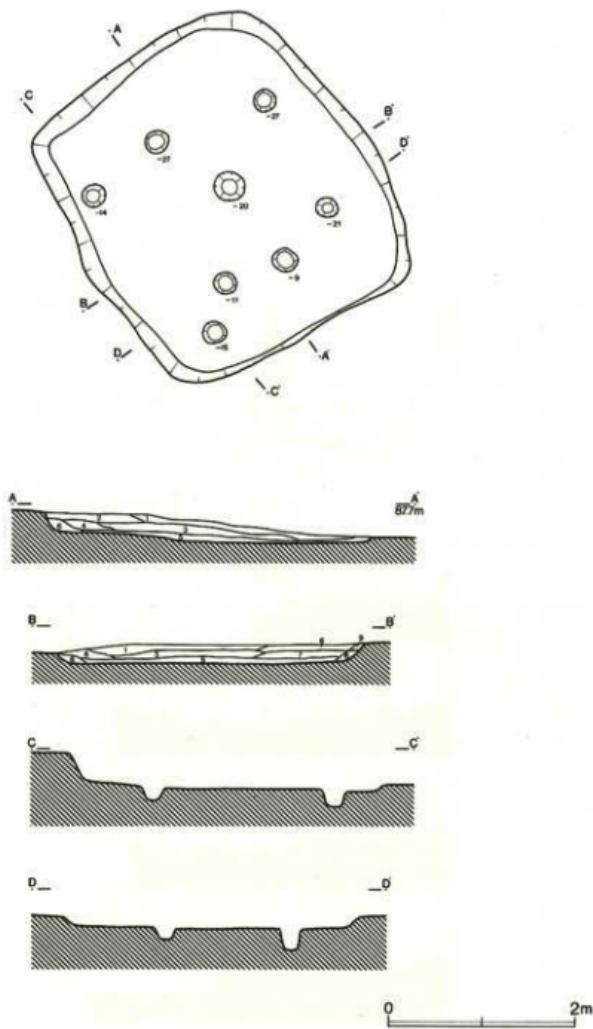
遺存していた部分は西側の1/3程で、プランは検出された範囲から方形か長方形と思われる。壁は西壁部で直線的に検出された。壁高は北、西壁で20cm、南壁では15cmを測る。壁の立ち上がりは傾斜を示すものである。床面は平坦であり、状態は軟弱なものであった。柱穴は8本が検出され、床面の残った範囲から5本、古墳周底から3本である。柱穴は壁に沿う配置と思われ、西、北壁部では直線状に並んでいる。各柱穴は深く明瞭に検出された。周溝および炉は検出されていない。

覆土は5層に分けられる。

- 第1層 暗褐色土である。(色調は暗い。粘性に富む。炭化物の含有が多い。)
- 第2層 暗褐色土である。(色調は1層より暗い。粘性に富む。炭化物の含有量1層より多い。)
- 第3層 暗褐色土である。(1層より色調は明るい。炭化物の含有量が多い。)
- 第4層 暗褐色土である。(3層中に黄褐色土のブロックを班点状に含有する。)
- 第5層 茶褐色土である。(暗褐色土のブロックと黄褐色土のブロックを含む。)



第31図 22号住居跡(1/60)



第32図 23号住居跡(1/60)

遺物の出土は少ない。土器は小破片のものが多く。東側の中央で床面から浮いた状態で検出された。

住居の時期は出土土器から諸磯 b 式期である。

23号住居跡（第32図）

E-30グリッドに位置する。単独で検出され保存状態は良好であった。

プランは長方形を呈す。東、西壁は3m、南、北壁は2.5mを測る。壁高は北壁部が20cm、南壁部が10cm前後を測る。立ち上がりは傾斜を備えている。床面は中央部で浅く窪んでいる。床面の状態は軟弱である。柱穴は8本が検出された。配置は南、北壁に寄って検出された。柱穴の深さは9~27cmを測る。周溝および炉は検出されていない。

覆土は9層に分けられる。

第1層 暗褐色土である。（色調は暗い。粘性に富んでいる。炭化物の含有が多い。）

第2層 暗褐色土である。（色調は明るい。粘性に富む。炭化物、赤色スコリア粒を含有。）

第3層 暗褐色土である。（1、2層の中間的な色調、粘性有、炭化物、赤色スコリア粒を含有。）

第4層 暗褐色土である。（3層中に黄褐色土のブロックを含む。）

第5層 茶褐色土である。（色調は明るい。粘性に富む。炭化物の含有が多い。）

第6層 黄褐色土である。（暗い色調である。炭化物を若干量含んでいる。）

第7層 茶褐色土である。（5層より色調は暗い。）

第8層 茶褐色土である。（暗褐色土のブロックを含む。炭化物を少量含んでいる。）

第9層 黄褐色土である。（暗い色調である。暗褐色土のブロックを含む。炭化物を若干含有。）

遺物の出土は土器、石器共に少ない。土器は覆土の上層で検出され、北側に寄って出土した。

住居の時期は出土土器から諸磯 b 式期である。

24号住居跡（第28図）

D-35・36グリッドに位置する。19号住居跡を切って重複する。東壁の中央部では129号土壙、北壁際には128号土壙に切られている。北西壁コーナー部では132号土壙を切って重複している。

プランは不整形である。西壁部は3.5mを測る。壁高は確認面から35cmを測る。壁の立ち上がりは傾斜を備えている。床面は壁際で若干高くなっている。床の状態は軟弱である。柱穴は14本が検出された。各コーナー部に寄って規則的に4本が検出され、南壁に寄った中央部で纏って配置される。各柱穴の深さは8~34cmを測る。周溝および、炉となる焼土は検出されていない。

覆土を説明する。

第6層 暗褐色土である。（色調は暗い。軟質だが締っている。炭火物を含む。）

第7層 暗褐色土である。（色調は6層より明るい。茶褐色土のブロックを含む。）

第8層 暗褐色土である。6層より色調は暗い。炭化物の含有が多い。）

第9層 茶褐色土である。（色調は暗い。暗褐色土のブロックを班点状に含む。）

第10層 茶褐色土である。色調は明るい。暗褐色土のブロックを若干含む。炭化物含有。）

第11層 茶褐色土である。色調は10層より明るい。締っている。炭火物を含む。）

第12層 暗褐色土である。（色調は7層より明るい。茶褐色土のブロック、炭化物を含有する。）

第13層 黄褐色土である。(色調は暗い。炭化物を含有する。)

第14層 黄褐色土である。(色調は明るい。赤色スコリア粒、炭化物を含有する。)

第15層 黄褐色土である。(14層と同一層である。)

遺物の出土は土器、石器共に少ない。土器は小破片が多い。実測個体は中央部の床面から若干浮いた状態で検出された。

住居の時期は出土土器から諸磯b式期である。

25号住居跡 (第20図)

D-42グリッドに位置する。13号住居跡内で検出され、覆土内には56号土壤と重複していた。住居の南半分は調査区外にはいる。

プランは検出された範囲から方形か長方形と思われる。北壁部の形状は直線的である。コーナー部は鋭い。壁高は確認面から70cmを測る。立ち上がりは傾斜が強い。床面は平坦であり、状態は軟弱であった。床面には柱穴、周溝、炉は検出されなかった。

覆土は14層に分けられる。

第4層 暗褐色土である。(明るい色調、粘性が有る。炭化物、赤色スコリア粒を含有。)

第5層 暗褐色土である。(4層より色調は暗い。炭化物含有する。)

第6層 暗褐色土である。(4層より明るい色調。粘性に富む。炭化物を含有する。)

第7層 暗褐色土である。(6層より色調が明るい。炭化物の含有量が少ない。)

第8層 茶褐色土である。(色調は暗い。暗褐色土のブロック、炭化物を含有する。)

第9層 茶褐色土である。(色調は明るい。粘性に富む。炭化物の含有量が少ない。)

第10層 茶褐色土である。(色調は10層より若干明るい。黄褐色土のブロックを含有する。)

第11層 茶褐色土である。(色調は明るい。炭化物を含有。)

第12層 茶褐色土である。(10層より色調が明るい。)

第13層 茶褐色土である。(色調は暗い。砂質であるが織る。炭化物、赤色スコリア粒を含有。)

第14層 茶褐色土である。(色調は明るい。黄褐色土のブロック、炭化物を含有する。)

第15層 茶褐色土である。(14層に近似する。黄褐色土ブロックの含有が少ない。)

第16層 茶褐色土である。(色調は明るい。砂質だが織っている。炭化物を含んでいる。)

第17層 茶褐色土である。(色調は暗い。若干の炭化物を含有する。)

第18層 茶褐色土である。(13号住居跡の柱穴覆土である。)

遺物の出土は土器、石器共に少ない。土器は小破片が殆んどで、浮いた状態で検出された。

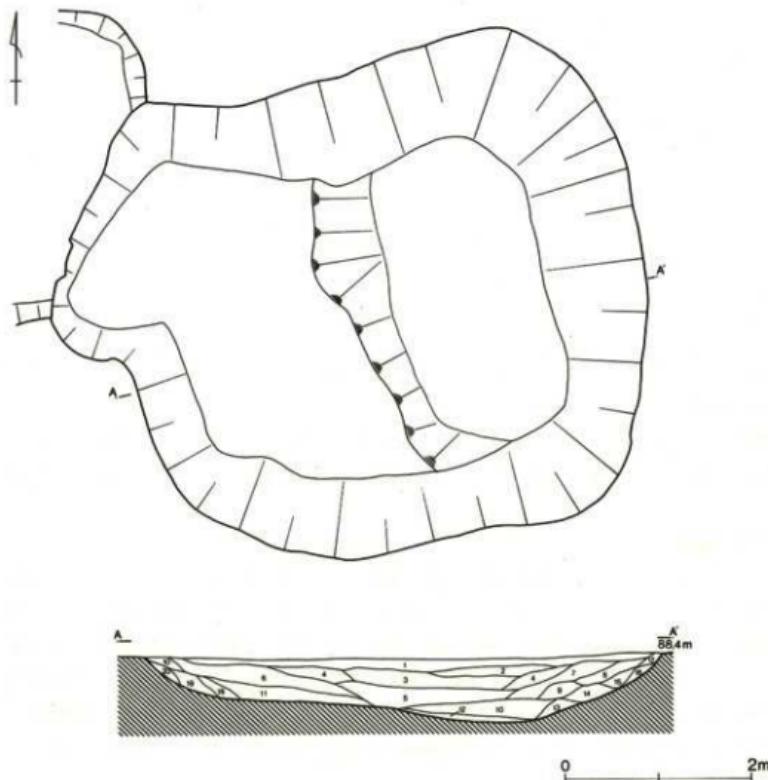
住居の時期は出土土器から諸磯b式期である。

(2) 竪穴遺構

1号竪穴遺構 (第33図)

E・F-40グリッドに位置する。15号住居跡を切って重複する。

プランは方形に近いが、北西壁のコーナー部が大きく張り出している。壁は各々膨んで曲線的であり、コーナー部は丸味を備えて隅丸となっている。壁は傾斜が強く磨鉢状で底面に達する。壁高



第33図 1号竖穴遺構(1/60)

は東側で70cmと深く、西側では30cmと浅い。床面は西側から東に向って傾斜をもって深くなる。床面からは柱穴等の施設は一切検出されていない。

覆土は黒色土を基本に20層に分かれ。この黒色土は軟質だが締っている。古墳周溝の覆土に近似している。

- 第1層 黒色土である。(色調は明るく褐色味を帯びる。軟質である。浮石を多く含有する。)
- 第2層 黒色土である。(1層より色調が若干暗い。他は同一である。)
- 第3層 黒色土である。(2層より黒味を増す。粘性を帯びる。浮石の含有量は少ない。)
- 第4層 黒色土である。(色調は明るい。粘性を帯びる。)
- 第5層 黒色土である。(色調は4層より明るい。粘性に富む。浮石の含有は無い。)
- 第6層 黑褐色土である。(5層より色調は明るい。黄褐色土のブロックを班点状に含有。)
- 第7層 暗褐色土である。(明るい色調である。軟質である。炭化物を含む。)

- 第8層 暗褐色土である。(7層に近似する。バサバサした土である。)
- 第9層 暗褐色土である。(8層より色調は明るい。8層より締っている。)
- 第10層 黒色土である。(漆黒に近い色調である。粘性に富んでいる。)
- 第11層 黄褐色土である。(暗褐色、茶褐色土のブロックを班点状に含む。固く締っている。)
- 第12層 黒色土である。(10層中に黄褐色土のブロックを含有する。)
- 第13層 黒色土である。(明るい色調である。若干量の黄褐色土のブロックを含有する。)
- 第14層 茶褐色土である。(明るい色調。粘性に富んでいる。)
- 第15層 暗褐色土である。(明るい色調である。粘性を有す。)
- 第16層 暗褐色土である。(15層より色調が明るい。)
- 第17層 黄褐色土である。(色調は明るい。粘性を備えている。)
- 第18層 暗褐色土である。(暗い色調、粘性を有す。)
- 第19層 暗褐色土である。(18層より色調が暗い。粘性を有す。)
- 第20層 黄褐色土である。(暗褐色土のブロックを含有。)

遺物は一切検出されていない。遺構の時期は、覆土が古墳周溝覆土と近似することから古墳群の造営に伴う遺構という推測も可能であるが、根拠に乏しく、古墳時代を含めたそれ以降のものであり、性格は不明である。

2号竪穴遺構（第38図）

D-34グリッドに位置する。北側は古墳周溝と重複して、北端の形状は不明となっている。南側は調査区外にはいる。東、西壁には62~75号土壤が絡んで検出された。平面形態は長方形を呈すものと思われる。全長は不明であるが、幅は230cmを測る。東、西壁は直線的な形状を示している。壁の立ち上がりは傾斜が弱く、深さは確認面から東壁部で20cm、西壁部では30cmを測る。底面はほぼ一定の面が続いて、北側では古墳周溝の底面と一致する深さであった。底面の中央部の西壁際からピットが1ヶ所検出された。ピットの深さは底面より15cmを測るものであった。覆土を説明する。

- 第1層 耕作土である。
- 第2層 茶褐色土である。(1層より締っている。全体に暗褐色土のブロックを含有する。)
- 第3層 暗褐色土である。(黒味のある色調。粘性に富む。炭化物、赤色スコリア粒を含有する。)
- 第4層 暗褐色土である。(色調は明るい。粘性を備える。黄褐色土のブロックを含有する。)
- 第5層 暗褐色土である。(3層に近似するが、色調が若干明るい。炭化物、赤色スコリア粘含有。)
- 第6層 暗褐色土である。(色調は明るい。粘性に富む。黄褐色土のブロックを若干含有する。)
- 第7層 暗褐色土である。(6層に近似するが、色調が若干明るい。)
- 第8層 暗褐色土である。(7層より明るい色調である。粘性に富む。炭化物を含有する。)

覆土は大粒の炭化物を多く含むもので63号土壤の堆積土の特徴と近似して、64号土壤の覆土とは含有量において相違する。各土壤との重複関係は明確に把握できなかったが、出土土器は同一型式内の同一段階を示す土器群が検出されている。竪穴遺構の性格は断定できないが、各土壤とは密接な関連を保有するものと思われる。遺構の時期は諸磯b式期である。

3号竪穴遺構（第42図）

E-33グリッドに位置する。遺構確認の段階では住居跡と思われたが、作業の進行に伴ない土壌を絡んだ竪穴遺構と併明したものである。覆土はシミ状の落ち込みとは異なり、炭化物を多く含んだ暗褐色土であり、掘り込みは明瞭に検出されたものである。土壌は122-124号が壁に絡み、中央部から127号土壌が検出された。竪穴遺構の平面形態は西壁部の北側が膨んでいるが、ほぼ隅丸の長方形を呈しているものである。東、西壁は4.5m、南、北壁は3.2mを測る。壁の立ち上がりは緩かであるが15-20cm前後のものである。床面は平坦な面が検出されたが、状態は軟弱であった。床面にはピット等の施設は一切検出されていない。本遺構は中央部から検出された127号土壌とは覆土および埋設土器の関係から密接な関連を保有するものと推測される。埋設土器は土壌の堆積が進んだ段階に設置された状況が土層断面の観察から明確に判断できる。2つの遺構から出土した土器は諸磯b式期の成立段階に位置するもので、絡んだ土壌の在り方は相互に有機的関連と結合の結果として理解されるべきものと推測される。

4号竪穴遺構（第44図）

F-30グリッドに位置する。153-157号土壌と絡んで存在するが、北側は調査外にはいり、南側は古墳周溝に切られた全体の形態と規模については不明となっている。検出された東、西壁部はほぼ併行することから長方形に近い形状と推測できる。遺構の確認段階では土壌の存在は不明であり掘り進んで、その存在が確認された。深さは確認面から15cm前後を測り、壁は明瞭に検出された。底面は平坦であり、状態は軟弱であった。本遺構と各土壌の関連は、出土土器から同一段階の時間的な位置関係を示して、覆土内からは土器片を多く出土している。中でも157号土壌の周辺からは炭化されるものが検出されている。155号土壌は浮線文を施す土器の出土から時間的に後続する段階の遺構である。本遺構の性格は不明であるが、各土壌とは密接な関連を示して、土壌と附隨する状況を示すものと言える。遺構の時期は出土土器から諸磯b式期である。

（3）土 壤

1号土壌（第34図）

D-27グリッドに位置する。形態は隅丸方形である。規模は長軸120cm、短軸100cmを測る。底は垂直に近い。深さは30cmを測る。壙底は平坦である。覆土は暗褐色土であった。遺物の出土は少なく、土器はいずれも小破片であり、覆土上面で検出された。土壌の時期は諸磯c式期である。

2号土壌（第34図）

E-26グリッドに位置する。古墳周溝と南側で重複する。形態は不整円形である。長軸は250cmを測る。南側にテラスを設けている。壁は傾斜が強い。深さは85cmを測る。壙底は東側で深くなり傾斜を備える。覆土を説明する。

第1層 暗褐色土である。（色調は暗い。粘性が有る。炭化物、赤色スコリア粒を含有する。）

第2層 暗褐色土である。（1層より色調は明るい。粘性に富む。）

第3層 黄褐色土である。（色調は暗い。）

第4層 茶褐色土である。（色調は暗い。粘性に富む。炭化物を含有する。）